

アフメト・ミドハト著

『ファトマ・アリエエ女史、あるいはオスマン人女流作家の誕生』(前編)

佐々木 紳

はじめに——訳者解題に代えて

(一) 凡例

本稿は、Ahmed Midhat, *Fama 'Aliyye Hanım yahüd Bir Muharri-i 'Osmanıyye'nin Nes'etü* (Istanbul: Kirk Anbâr Matbâ'ası, 1311) の全訳である。底本には、トルコ共和国エルズルムにあるアタテュルク大学中央図書館 (Atatürk Üniversitesi Merkez Kütüphanesi) の「セイフェッティン・オゼゲ・コレクシヨン」(Seyferin Özege Koleksiyonu) に収められたオスマン語刊本を用いた<sup>1)</sup>。訳稿の作成にあたり、刊本全二〇〇頁のうち一一二頁まで(「緒言 Trade」)「幼年期 Tufulıyyet」(少女期 Savâbel) を前編、それ以降(「青年期 Sebâel」(若め妻 Genç Zevce)「大成 Tekemmül」) を後編とした。訳文中の「( )」内は訳者による補足ないし説明である。「くま

れに( )」内に原綴を示した。訳者の判断で適宜改行した箇所もある。ヒジュラ暦の年代をグレゴリウス暦(西暦)に換算して二カ年にまたがる場合(たとえば、ヒジュラ暦一四四二年は西暦二〇二〇年八月二〇日から二〇二一年八月九日までである)、一方の年代に特定できなければ「二〇二〇/二一年」のように表記した。

(二) アフメト・ミドハトとファトマ・アリエエについて

原著者アフメト・ミドハト (Ahmed Midhat, 一八四四〜一九二二年) は、オスマン近代を代表するジャーナリストにして作家である。児童教育に携わったことでも知られている。イスタンブルで生まれたアフメト・ミドハトは、官員であった兄のついでで改革派官僚ミドハト・パシヤ (Ahmed Şefik Midhat Paşa, 一八二二〜一八四年) に見出され、バルカン半島のトゥナ (ドナウ) 州やイラクのバグ

ダード州で州官報の発行に勤しんだ。一八七一年にイスタンブルに戻ると、みずから印刷所を開いて雑誌を発行した。七三年、とある新聞の廢刊騒動に巻き込まれてエーゲ海のロドス島に流され、当地で創作活動や児童教育に力を入れた。

三年間の流刑生活の後、一八七六年に赦されてイスタンブルに帰還すると、官報の編集責任者や帝国印刷局長を務めた。七八年、トルコ語新聞『真実の解説者』(Tevcinan-ı Hakikat)を創刊し、これは半世紀近く続くトルコ近現代史上屈指の大衆紙となった。八九年にはストックホルムで開かれた第八回国際オリエント学会議に出席し、パリの万国博覧会を見学するなど、二カ月半ほどをヨーロッパ諸国で過ごしている。一九〇八年に公職を退くと、イスタンブルの大学校(Darü'l-Fünun)や女子師範学校(Darü'l-mu'allimat)で教鞭をとり、孤児院(Darü'l-safaka)で囑託職員として勤務中の一九一二年、心臓発作に斃れた。

そのアフメト・ミドハトが、オスマン近代初の本格的な女流作家と評されるファトマ・アリエエ(Fatma Aliye Topuz、一八六二～一九三六年)と知り合ったのは、一八九〇年ごろのことである。そして、秀才・文才に恵まれた彼女の前半生についてアフメト・ミドハトが記した評伝こそ、本書『ファトマ・アリエエ女史、あるいはオスマン人女流作家の誕生』にほかならない。

ファトマ・アリエエは、オスマン近代を代表する政治家にして学者ジェヴデト・パシヤ(Ahmed Cevdet Paşa、一八二三～九五年)

とその夫人アドヴィイェ・ラビア(Adviye Rahîa、一八九六年没)の第二子としてイスタンブルに生まれた。<sup>2)</sup>五つ上の兄アリ・セダト(Ali Sedat、一八五七～一九〇〇年)は、記号論理学をオスマン帝国に初めて紹介し、ガラタサライ王立高等学院や法学校などで論理学を講じた学者である。<sup>3)</sup>二つ下の妹エミネ・セミイェ(Emine Seniye、一八六四～一九四四年)は、長じて姉とともに文筆活動や社会活動に携わり、女性の地位向上や児童教育の改善に力を尽くした。<sup>4)</sup>

前半生の詳細は本書に譲るが、ファトマ・アリエエは一八七九年に侍従武官ファアイク・ベイ(Mehmed Faik、のちパシヤ、一八五四～一九二八年)と結婚し、九〇年にフランス語小説のトルコ語訳を発表して文壇にデビューした。以後、一九一五年ごろまで創作や批評に勤しんだが、二四年以降は文筆活動から完全に身を退いた。三四年制定の「氏姓法」(Soyadı Kanunu)を受け、父方の家系にちなむ「トプズ」(Topuz)を姓とした。ファトマ・アリエエの書簡をはじめとする関連資料は、トルコ共和国イスタンブルにあるアタテュルク文庫(Atatürk Kütüphanesi)の「ファトマ・アリエエ女史一件文書」(Fatma Aliye Hanım Evrakı)に収められている。<sup>5)</sup>なお、二〇〇九年からトルコ共和国で通用している五〇トルコリラ紙幣には、彼女の晩年の肖像が採用されている。

### (三) 刊行の経緯と刊行年について

アフメト・ミドハトがファトマ・アリエエに送った手紙によれば、一八九五年一〇月末に脱稿したという本書は、まず『真実の解説者』に連載されたが、これはすぐに中止された。ファトマ・アリエエは、同年一月初旬の手紙のなかでそのわけを尋ねている。

私の経歴（の連載）を『真実の解説者』で読んでおりましたが、この二日ほど見かけません。完全に書き上げて送付したと先日のお手紙でおっしゃっていたので、いったいどういうわけで二日間も掲載されないのかと怪しんでおります。<sup>7)</sup>

これに対するアフメト・ミドハトの返信には、その理由がつぎのように記されている。

経歴（の連載）を中止した理由は、幸いなる令兄殿（アリ・セダト）が内務省に嘆願したがゆえに命じられたからです。ですが、差し止めは深刻なものではありません。教育省から書籍のかたちで印刷する許可を得たからです。<sup>8)</sup>

実際、兄アリ・セダトは妹ファトマ・アリエエの夫ファアイク・パシヤに宛てた一八九五年一〇月下旬の手紙のなかで、本書に家族の内情、とくに父ジェヴデト・パシヤや自身に触れる部分があると

して懸念を表明している。<sup>9)</sup>トルコ文学研究者のセネム・ティムルオールによれば、妹の名声が高まることに對する兄の嫉妬心も事態の背景をなしていたという。<sup>10)</sup>結局、教育省の審査は同年一月初旬に終わり、晴れて本書刊行の運びとなった。<sup>11)</sup>

刊行をめぐる以上の経緯から、本書が一八九五年中に書籍化されたことがわかる。これまで本書の刊行年は、一八九三／九四年とされるが多かった。これは、本書の表紙に刊行年として記された「一三二一年」をヒジュラ暦の年代として西暦に換算した結果である。だが、アフメト・ミドハトは本書のなかでジェヴデト・パシヤに言及する際に、しばしば「今は亡き」(merhum) という言葉を付けている。さらに、ジェヴデト・パシヤの「逝去」(vital) を示唆する記述も見える。ジェヴデト・パシヤが没したのは一八九五年五月下旬のことなので、本書の刊行はそれ以降と考えなければならぬ。

そこで上記の「一三二一年」を、一七世紀後半からオスマン帝国の会計年度として用いられていたユリウス暦（ルーミー暦）の年代として西暦に換算すると、一八九五／九六年となり、これは本文の記述とも一致する。刊行をめぐる如上の経緯も勘案すると、本書の刊行年は一八九五年とするのが適当であろう。以上の考証に基づけば、本書はファトマ・アリエエが実父ジェヴデト・パシヤを亡くした直後に刊行されたことになる。この点を踏まえると、以下に見る「心の父」アフメト・ミドハトの巻頭言に込められた心遣いが、

いっそう温かく感じられるにちがいない。

注

- (1) オスマン語とは、オスマン帝国期からトルコ共和国初期にかけて使用されたアラビア文字表記のトルコ語のことである。トルコ共和国では一九二八年以降、ラテン・アルファベットをもとに作成された二九の「トルコ・アルファベット」(Türk alfabesi)でトルコ語を表記することとされた。本訳稿の作成にあたっては、オスマン語刊本のほかに「トルコ・アルファベット」への転写版として以下の二点を参照した。Ahmet Mithat Efendi, *Fama Aliye Hanım yahut Bir Muharri-i Osmaniyenin Neşeti*, Müge Galin, ed., İstanbul: İsis, 1998; Ahmet Mithat Efendi, *Fama Aliye Hanım yahut Bir Muharri-i Osmaniyenin Neşeti*, Ayşe Asır, ed., İstanbul: Dergâh Yayınları, 2016.
- (2) シェヴァト・パシヤの経歴については、彼の同時代史的備忘録『覚書』(*Tezâkir*)に詳し。Cevdet Paşa, *Tezâkir*, Cavid Baysun, ed., 4 vols, Ankara: Türk Tarih Kurumu, 1953-1967.
- (3) Necati Önder, “Ali Sedad,” *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi (TDVİA, hereafter)*, vol. 2, İstanbul: Türkiye
- (4) Diyanet Vakfı, 1989, p. 442.
- (5) Kadriye Kaymaz, *Gölgedeki Kalem: Emine Semiyе*, İstanbul: Küre Yayınları, 2009.
- (6) 所蔵カタログとして、以下を参照。Mübeccel Kızıltan and Tülay Gençtürk, eds., *Atatürk Kitaplığı Fama Aliye Hanım Evreka Katalogü-1*, İstanbul: İstanbul Büyükşehir Belediyesi, 1993.
- (7) 『真実の解説者』に四回にわたり掲載されたのは、本書の二頁から五四頁まで、つまり巻頭言から「少女期」の一部(フラビム・シエウキ・エフエンディに書字を学ぶ逸話)までである。Ahmed Mithat, “Fama ‘Aliyye Hanım yahud Bir Muharri-i ‘Osmaniyye’ nin Neş’eti,” *Tercümân-ı Hakikat*, nos. 5205-5208 (28-31 Teşrin-i Evvel [October] 1895). なお、フムド・ニズン・マブナト・アリ・エハのあとだに交わられた書簡の多くは、この文献に収載されている。Ahmed Mithat Efendi, *Fazl ve Feylesof Kızım: Fama Aliyye Mektuplar*, Fama Samime Inceoglu and Zeynep Suslu Berkas, eds., İstanbul: Klasik, 2011.
- (8) Ibid., pp. 318-319.
- (9) Ibid., p. 319. 当時、新聞雑誌の発行は内務省 (Dahiliye Nezâretü) 書籍冊子の発行は教育省 (Ma‘ârif Nezâretü) の所管であった。Fatmagül Demirel, *II. Abdülhamid Döneminde Sansür*, İstanbul: Bağlam Yayıncılık, 2007.

- (9) Ahmed Midhat Efendi, *Fazıl ve Feylesof Kızım*, pp. 454-455.  
(10) Senem Timuroğlu, *Kanallanmış Kadınlar: Osmanlı ve Avrupai Kadın Yazarların Dostluğu*, İstanbul: İletişim Yayınları, 2020, p. 45.  
(11) Ahmed Midhat Efendi, *Fazıl ve Feylesof Kızım*, pp. 323-324.

ファトマ・アリエエ女史、あるいはオスマン人女流作家の誕生

著者 アフメト・ミドハト

教育省の許可を得てクルク・アンバル印刷所で印刷された。

イスタンブル〔ルーミー暦〕一三二一年〔西暦一八九五年〕

ファトマ・アリエエ女史へ

愛するわが娘よ。この六、七年ほど、君とは心の父と娘の間柄だ。君にはまだ何も贈物をあげていなかったね。これは失敬。そうではないかね。だが、君にふさわしい、どんな贈り物を見つけてあげることができようか。とくと思索してみるに、君への贈り物には君を描いてほかにないことがわかったよ。だから、本書は君自身のことなのだ、わが娘よ。私は君自身を君に捧げようと思う。さて、君は受け入れてくれるだろうか。

アフメト・ミドハト

### 緒言

本書を記した目的は、わが心の娘、ファトマ・アリエエ女史を讀者諸賢に紹介することではない。なぜなら、数々の珠玉の作品によつて、われらがオスマン帝国の界隈のみならず——その作品がアラビア語や英語やドイツ語に翻訳されたことで——新旧両大陸にも広く名声を勝ち得た、かの誉れ高き女史をあらためて紹介しよ

うなどと努めることは、わかり切った事柄を吹聴するだけの典型にほかならず、その愚を冒そうものなら、いかに弁解しようとも容れられはしないからである。本書の副題が明示しているように、本書を記した目的は、われらがオスマン帝国の界限で一人の女流作家が誕生した様子をご覧に入れることにある。本邦でかような女流作家が現れたことは、まことに多くなって多くの人がびとが、いまだ夢にも思わぬ驚異的な出来事なので、こうして逸る筆が無駄に終わることもないものと思われる。

なるほど、イスラーム教徒からはたしかに大勢の有徳の女性が輩出した。その上、彼女らの多くは一般的な教育を受けており、大丈夫たる偉大なウラマー（イスラーム諸学を修めた知識人）のなかには彼女らを教え子とすることに誇りを感じていた者もいるほどである。だが、かつての教育の方法や条件は（今とは）異なっていた。現在、聖なるモスクのいくつかで女性が男性の後方に並んで礼拝をおこなっているように、当時の一般的な講義においても女性はそのように臨席し、聴講していたのである。学習用の書見台のところに一人の女性が座っていたとして、彼女が若くて美しいようであれば、その前には現在われわれが「フランス語のバラヴァン（paravant）にちなんで」「バラヴァナ」と呼ぶところの衝立のような遮蔽物が据えられ、教授がおこなわれたものであった。だが、時代の価値観が変わってしまったので、今ではそうした状況など想像することさえできないほどである。

ファトマ・アリエ女史は、本邦の女子教育がまだ今ほどに整備されず、発展もしていなかった時代に生まれた女子であり、彼女らのなかから有徳の大丈夫を驚愕させるような学者や文筆家が現れるなど、まことに多くなって容易には信じがたい驚異的な出来事なのである。これにはわれわれも同意せざるをえない。なぜなら、こんにちヨーロッパでは、女子も男子と同じように学習教育を受けるべく、初等教育から高等教育にいたるまですっかり教育機関が完備され、女性にも医師や弁護士や技師などの免状が与えられるようになってはいるが、哲学や科学や文学の基礎の上に判断力を養い、傑作を上梓して才能を証したわずか数人の女性を除き、ヨーロッパですらそのような人びとを見かけることができないにもかかわらず、本邦でそのような女流作家が登場するなど、時代の道理からして期すべくもないことだったからである。この誉れ高き女史と関係を取り結ぶことがなかったなら、われわれもまたそのような女性が登場するなご信じることもなかったであろう。一部の人士が思い違えているように、彼女が自分自身の名で発表した作品が中傷を受けたり紛い物だと誹られたりすればするほど、われわれもまた信じ込んでしまつたにちがいない。かかる次第で、非凡にして類まれなる才能の持ち主に数えられる人物の来歴について与えられる詳細が、ご関心のある向きに尋常ならざる重要性をもって受け入れられるであろうことに疑いはないとの思いから、くだんの有徳の女史が世に出るにいたつた経緯について、情報を集めて伝える必要があると考へた。

とはいえ、告白しなければならぬのだが、ファトマ・アリエ女史の経歴を初めて紹介する榮譽はわれわれに帰するものではない。なぜなら、アラブ人やイギリス人やアメリカ人の新聞のいくつかが、くだんの女史の経歴について彼らが調べることのできたことどもを、われわれよりも先に公表しているからである。その上、「一八九三年の」シカゴ万国博覧会で展示された諸作品ゆえに、アメリカの新聞の多くが、くだんの女史について経歴紹介というかたちでたくさんの記事を掲載して称賛した。だが、ファトマ・アリエ女史がいついつにだれその子として生を享け、——ご尊父「ジェヴデト・パシヤ」のお仕事の関係で——どこその地に足を運んだだとか、だれそれと結婚して現在は何人の子供を授かっているだとか、そうした事情に関して与えられる月並みな情報が、いったい何の役に立とう。これからの著述家は、一人の哲学者フェイソフが突然現れたかのように記すのではなく、必要不可欠な学術知識を修得するに際してでさえ時間や場所の制約を受け、しかるべき便宜を受けることのない良家の令嬢が、その知的水準を時とともに向上させる様子について、あたかも彼女と一緒にいたかのように、確実な情報をもたらしながら詳説することに心を致さなければならない。願わくは、本書における探究から生じることが期待される得心や利益に達せられんことを。

然り、本書の探究から得心や利益が生じることは確実である。得心が行くことは言を俟たない。なぜなら、一見してありえないよう

に思われることが実際に起こりうるさまを目にすることは、それゆえに抱いていた疑念を払拭し、その点で安堵をもたらすにちがいないからである。利益が生じることも言を俟たない。というのも、くだんの女史についてわれわれがおこなう探究は、サイコロジつまり心理学やペダゴジつまり教育学にかかわることなので、ほかの女性たちが第二のファトマ・アリエ女史になろうところさし、その父親たちも自分の娘をそのやり方で育ててみたいと望んだとき、その望みを実現するために何が妨げになるか、また、どのような状況が望みの実現を容易にするか、といったことを踏まえて目標に達する確かな道を示すことになるはずだからである。

それはともあれ、ファトマ・アリエ女史が世に出た様子をこのように記すべく、かくも詳細な調査に成功したのは、この小生を措いてほかにだれもいないと断言することができる。なぜなら、『テルシメトメハキカト「真実の解説者」紙に掲載されて「一部が」おおやけにされ、その大部分がいまだ公刊されているこの六、七年の手紙のやり取りの間に、あらゆる機会を捉えて、くだんの女史が世に出た様子について多くの真実を知ることができたからであり、同時に彼女にかかわりのある人びと、ことに彼女のご尊父にして今は亡きジェヴデト・パシヤからも多くのことどもを聞き出すことができたからである。したがって、この点で最も事情に通じた人間を探すことになったとして、私自身が名乗り出ようとも却下されることはあるまいとの自負に揺らぎはない。

実のところ、否定のしようもないのだが、私が本書を記そうところざしたとき、これに助力してほしいということでファトマ・アリエ女史に格別のご厚意をお願いする挙に及び、たくさんのことごとについて詳細な説明を所望した。ご本人もご厚意とお骨折りを厭わなかった。これを否定することは言うに及ばず、むしろ神とご本人に感謝して公言することを誇りに思う次第である。なぜなら、今まで当人の来歴について多年にわたり手紙をやり取りした末に明るみに出した情報を、最後に如上の願い出によって補完することが叶わなかったなら、本書をすつかり得心の行くまで万全を期して記すこともできなかったからである。その際に心がけたのだが、本書は私自身が記したとはいえ、必要な箇所については経歴の持ち主自身の筆で綴ってもらうことにしよう。なぜなら、もっぱら個人の特別の事情ゆえに、いかなる場合も他人の筆の及びえない状況というものが、ままあるからである。個人の来歴を解説するにあたって本人の筆で綴ってもらうことにより、そうした個人の特別の事情の重要な側面を見極める際の確かな礎を提供することができる。だが、これは何と困難な作業であることか。くだんの有徳の女史はたいへんな謙遜家なので、本人の自己評価の言葉をそっくりそのまま鵜呑みにしてはならない。必ず卑下してくるのである。かくも無用の謙遜をたしなめようものなら、韜晦はますます度を過ごすことになる。そうした過不足を取り除いて穏当なところを突き止めることは、まことにもって最大の難事にほかならず、この点でわれわれの

あいだに多くの手紙のやり取りがおこなわれたのだが、われわれはついにそれをなすとげることができたのである。

かくて本懐を遂げることができたことをもって、私としては本書が真に完全なるものであることが保証されたと判断するにいたった。というのも、この評伝では、部外者たる著者がなしうるかぎりの調査と、その調査に従って導出した判断や評価とを私自身の筆で記す一方、くだんの女史にご自身の筆で綴らせようとわれわれが望んだことどももまた、そのように「手紙のやり取りを通して」綴らせることに成功したからである。かくも新たな形態をとる著作は、オスマン語ではいまだ記されたことがなく、オスマン語以外の言葉でも記されたことはあるまい。かような信念とともに本書を読者諸賢にお届けする次第であり、それをお読みになることで大いに役立て、大いにお楽しみになることを、われわれは恐れ憚ることなく請け合うものである。

アフメト・ミドハト

## 一、幼年期

ヒジュラ暦一二七九年の第二ラビー月二十七日火曜日の夜（ユリウス暦一八六二年第一テシユリーン月九日〔西暦一八六二年一月二二日〕に相当する）、イスタンブルで今は亡きジェヴデト・パシャの家に一人の女兒が誕生し、「ファトマ・アリエ」と命名された。

かかる上流社会で出来た子供の誕生について初めに与えられる情報は、みな紋切り型になってしまふのだが、彼らもこの新生児のために乳母や保母といった必要な世話係を任命し、それらの人びとは専用の部屋に住まわされることとされた。かかる子供の人生の第一年目、二年目、三年目については、書きたいと念じても取り立てて記録や言及に値することは見当たらない。出入りする人びとも多い宰相級や元帥級の家を切り盛りする夫人は、中流の女性たちとは比べものならぬほど家政の務めに忙しく、それゆえ子供の面倒を見ることのできる時間は極めて限られていた。したがって、かくも敷居の高い家の母親たちは、庶民の母親たちのように子供をふところから落とさぬよう気を配る必要もない。ふところから下ろした子供を自分の手でゆりかごや釣り床に寝かせ、慈愛溢れる胸に湛えた甘美な飲料(母乳)を口に含ませて満足するまで待ち、眠りを誘うために物悲しい調子で守唄を口ずさんだり、夜中に子供が目覚めようものなら、自分の甘美な眠りを犠牲にし、乳児をふところにかき抱いて乳房を含ませたり、半睡半醒の状態であらうことのようにぶつぶつと守唄を口ずさんだりするといったこととは、上流社会の母親たちにとってはまことにものごとくはない状況なのである。

以上の仕事は子供の世話を託された人びとがおこない、その結果としておさなごの機嫌がよくなり、蔷薇色の顔がほころび、きれいな目が輝くようになったとき、実母の都合が許すようであれば、こ

覧になつてもらいなさい、かわいがつてもらいなさい、口づけしてもらいなさい、においをかいでもらいなさい、楽しませてもらいなさい、などと云つては愛情の成果を実母の胸元に送り届けるのであり、実母が愛児を見るのもそのときだけなのである。あまつさえ、崇高なる国家(オスマン帝国の雅称)の名立たる大臣のお一人であるばかりか、学問や文筆の達人のお一人でもあるがゆえに、処務をこなしたあとに残された時間を読書なり執筆なりにあてるジェヴデト・パシヤのような父親にとつて、人生の最初期の段階にある子供のもとを訪れる機会がいつそう限られたものになるであろうことは明白である。

文明の水準が低いため、そもそも子供とは両親の腕のなかで育てられるべきであると考え、そこに至福の家族像を求める幸せな人びとが、上流社会において両親が子供と面会するのになつたこれだけの機会や理由しか見出しえないさまを見て、いささか不憫に感じるとしても、ゆえなきことではない。だが、慰めとして言い添えておくのだが、この面では本邦の上流層のほうがヨーロッパの上流層よりもよほど恵まれている。なぜなら、ヨーロッパでは子供を自宅のなかで養育する上流層は比較的少なく、その多くは外部で、ときに村々で見つけた乳母におさなごを預けることこそ子供の健全な成長にいつそう適していると考えているからであり、この状況下では愛児と面会する機会もごくまれになつてしまふからである。

かくてファトマ・アリエ女史もまた、こうした上流層の子女

の一人であり、幼年期に特有の世話は保母や子守に委ねられていた。これらの人びと、あるいは彼女の家族が伝えるところによれば、この小さなごはほかの子供と比べてたいへん早く歩き出し、また話しはじめたそうである。それも、たどたどしい幼児言葉などではない。会話の能力を身につけるやいなや、たいへん明晰に話すようになったというのである。二歳のころに授乳を断つときがやって来ると、おおかたの習わしに従って、子供におっぱいのことを忘れさせるべく乳母から引き離した。女史はこの別離もたらした悲しみを、ご家中の人びとにたいへん明晰かつ哀調を帯びた言葉で述べ立てたので、聞く者の目からは同情の涙が溢れてやまなかったそうである。一度など彼女におっぱいを断念させ、そのようにして黙らせようと「おっぱいは人喰い鬼が食べちゃったよ」などと言ってみたのだが、当人は「私はおっぱいなんかいらぬの。乳母ニホを連れてきてちょうだい。私は乳母に会いたい」と言ったという。そして日夜、人喰い鬼に呪いの言葉を浴びせては、それがおっぱいだけでは飽き足らず乳母までも喰ってしまったと言って泣き暮らしていたという。かわいそうなことではあるが、ご家中の人びとは彼女が乳母を見たらまたおっぱいを欲しがらうと懸念し、子供の願いを叶えてやることはなかった。彼女が口にする哀調を帯びた言葉には当人たちが泣かされたというが、二度と乳母を子供の目に触れさせることはなかったそうである。

記憶力に関して、あるときファトマ・アリエエ女史と私のあい

だに手紙で議論が交わされたことがあった。くだんの女史は、人間が幼年期に出会った事柄は記憶にいっそうよく残ると主張し、その論拠として彼女自身の経験を書いて寄こしたのだが、それをそのままここに引用するほうがよろしかろうと考え、以下のとおり引用する次第である。

私の記憶を過去に向けて探ってみますに、その記憶は三歳のときまでさかのぼります。それより前は思い出すことができません。私どもが生まれ育った世界では、子供は父親や母親のそばで、その腕に抱かれて大きくなるわけではありません。この点については、父と母から十分な情報を得ることができようかと思えます。私どもは〔ヒジュラ暦〕一二八二年〔西暦一八六六年〕、私が三歳のときに〔シリア北部の〕アレツポに参りました。アレツポに赴く少し前のイスタンブルを記憶に留めております。どのようにかと申しまして、たかだかルーメリ・ヒサールにある私どもの別邸の門前に広がる海辺の景色だけなのですが。別邸のその他の面については何も覚えておりません。イスタンブル〔旧市街〕にある本邸については、広間と部屋4の扉が目に浮かんでまいります。一つだけ部屋も覚えてはいるのですが、きつと私どもにあてがわれた部屋なのでしょう。まあ、保母、そして小柄な召使の老婆が、私を遊ばせるために室内で飛んだり跳ねたりさせてくれました。やがてばあやが亡く

なると、彼女の部下であった保母と小柄な老婆だけになりました。ですが、当時の父や母についてはいつこうに思い出すことができないのです。両親のことは、やつとアレッポの記憶のなかに見出すことができます。アレッポには三歳で参りまして、五歳でイスタンブルに戻ってきました。私どもがどのようにして赴いたかは覚えておりません。ただ海路を行く途中、船室の寢台から見える景色が私の心を締めつけたので、一つはそれを、もう一つは陸路を行く途中で泊まった不便な旅宿の部屋の広間を、そして母が「私たちはここでどうやって夜を過ごせとこの」とこぼしていたことを思い出せるほどに過ぎません。ここにとのようにしてやって来たのか、その後、そこからどのように発ってアレッポにいたったのか、そのあたりについては何も覚えていません。

ファトマ・アリエエ女史がこのようなかたちで幼年期にアレッポまで赴いたのは、ご尊父たる今は亡きジェヴデト・パシヤがアレッポ州知事に任ぜられ、新州制の基礎を据えるべく当地に赴任した関係で出来たということを示添えておこう。ともあれ、子供の記憶力が何歳まで、どのようにして記憶を保持することができるのかという話題の続きとして、彼女がアレッポでの滞在期間をどのように記憶に留めているのかについて、ふたたび本人の筆から発した言葉を以下のとおり引用して続けることにしよう。

アレッポのことは、とてもよく覚えております。政庁の区画や奥向きのほうは、広々としてたいへんきれいでした。私は多くの時を表向きのほうで過ごしていたものです。私には別して専属の守役がおりました。ですが、私はその人物を全然好きになれませんでした。むしろ、父に仕えるスレイマン・アアという名のコーヒー給仕になつておりました。私は彼のが大好きだったので、コーヒーを淹れる炉端で多くの時を過ごしたものです。当時の州政庁の様子はご存じですね。コーヒー給仕長やタバコ給仕長といった多くの親方連中、彼らの右腕の職人たち、それに徒弟たちもいて、政庁内はたいへんにぎやかでした。でも、私はスレイマン・アア以外の人にはなつかなかったのです。それにしても、この人物はまことに愛すべき人でありました。私は何を尋ねても彼が答えてくれたので気に入っていました。彼は私と語らうことをいつこうに厭いませんでした。まさにオスマン人たることを体現した人物でして、自分がめぐり歩いた土地や目にしたものについて話してくれたものでした。驚くべきことに、あとから知ったところによれば、この人物は本来たいへん寡黙な人柄だったのですが、私とはあれこれとよく話してくれたのです。彼が父にコーヒーを持つていくとき、私が彼のそばから離れようとせず、一緒に歩いて行くものなら、職務に細心の注意を払って厳かに遂行するこの人物は、私を扉のところまで連れていき、室外で待たせてお

て、彼が出てくると、私たちは一緒にコーヒーを淹れる炉端に戻るのでした。この人物が私にしてくれた話のなかには、しばしばたいへん重要な話題が含まれておりました。武器の種類やその扱い方にいたるまで、彼は説明してくれたものです。私専用の白毛をしたバグダード産のロバがおりました、名前を「アブー・ジャームース」と言いました。私どもが外出するときには、スレイマン・アアがそのロバに乗り、私を腕に抱えていたのですが、彼はやがて私を一人で乗せることに力を入れはじめたのです。あたかも私をアマゾネスに仕立て上げるかのようになり、馬術に関するたくさんの詳細な情報を教えてくれました。私をロバの上に乗せ、私の片側を彼が、もう片側を守役を務めていた人物が支えて、一人で手綱を操れるようにしてくれました。お話しする番が来ましたので、彼のことについてもご説明いたします。私には別して一人の守役があてがわれていたのですが、私はその人物をいっこうに好きになれませんでした。私どもがロバで外出するとき、スレイマン・アアが私を腕に抱えてロバに乗るのですが、その守役の男は馬子のようにならざるに、徒歩で私どもの後ろからついてきたものです。あの守役をどうして好きになれましょう。スレイマン・アアは、イギリス人やフランス人の様子に関する情報まで教えてくれるほどに、私の関心を十分に惹きつける話をしてくれました。これに対して、その守役はたぶん私を喜ばせるために、フェス（いわゆる

トルコ帽）を宙に放り投げたり、宙返りをしてみせたりしてくれるのですが、そうした戯れごとが逆に私の反感を買う原因になったのです。スレイマン・アアがたいへん忙しくして私にかまっていられないようなとき、彼は私を父の幕下に控えている家士たちのもとに預け、私はそこでたいへん行儀よく座っていたものでした。実のところ、私はこの人びとのこともスレイマン・アアほどには好きになれなかったのですが、それでもあの守役をはじめ、その後、彼が辞めさせられて代わりにとつかえひつかえやって来たほかの守役たちほどにうんざりさせられることはありませんでした。何よりも遊戯や玩具が好きではなかったのです。私にはきちんとしたことを話してほしかったです。話し、私もそれを聴きたかったのです。スレイマン・アアが話している最中、私が耳を澄ませて聴きながら寝入ってしまうと、彼は私を腕に抱えて奥向きに運んでくれたものです。なぜなら、私は起きているうちは絶対に奥向きにしようとは思わなかったからです。

ファトマ・アリエエ女史は、彼女の頭に残っている記憶がどこまでさかのぼれるかを説明する目的で、かねてわれわれにあれこれと手紙を書いて寄こしたのだが、こんにち彼女の評伝において、その幼年期をご自身の筆で綴るかのようになれわれが利用できることは、まことにありがたいことである。この種の回想の断片ならま

まだまだあるのだが、スレイマン・アアについての話題を締めくくりにあたり、以下のことをわれわれから申し添えておかなければならない。すなわち、ファトマ・アリエエ女史が幼年期にくだんのスレイマン・アアを気に入ったのも、至極もつともなことである。この人物は今もご存命である。年齢は百を超えているが、今は亡きジェヴデト・パシヤが逝去するまでその御許に出仕しつづけた。また、当人は単に今は亡きパシヤの召使というに留まらず、それ以上に一面では同僚でもあった。今は亡きパシヤがまだ結婚前に故レシト・パシヤ<sup>⑥</sup>の部下であったころ、このスレイマン・アアも今は亡きレシト・パシヤの次席コーヒー給仕であったという。だが、当時のコーヒー給仕長はたいてい貴顕が務めており、もつぱらコーヒーを淹れる炉端を差配して監督する務めに忙しかったので、今は亡きレシト・パシヤのコーヒーはスレイマン・アアが淹れて持っていたであろうである。

当人は読み書きができ、博識にして頭脳明晰、物腰の柔らかい人物であった。一時は正式に試験を受け、郡長職に就いてその能力を発揮し、いくつかの土地に赴任したこともあったが、今は亡きジェヴデト・パシヤがアレツポ州知事になると、彼らのあいだにあった旧交ゆえにコーヒー給仕長としてアレツポに同行し、ついに離れることがなかった。今でこそ、くだんのご老体はご高齡の極みに達してしまつたものの、最近までコーヒーを淹れる炉端を離れることなく、今は亡きパシヤのコーヒーを自身の手で淹れていたのだが、さ

すがにみずから運んで供することは叶わなくなつていた。一時は十分な年金をあてがわれて引退させられ、自宅で奥方とともに暮らすことを許されたのだが、くだんのご老体は「私はコーヒー沸し<sup>⑦</sup>を手にしながら死ぬことができれば本望だ」などとうそぶいて、自宅からふたびコーヒーを淹れる炉端に居場所を移し、この点で奥方がいかに引き留めようと徒勞に終つた。

幼年期の回想として、以下の話もファトマ・アリエエ女史自身の筆から明らかになつた。

父の家中以外で最も早く親交を結んだのは、アレツポのイギリス領事スキン<sup>⑧</sup>氏です。きつと子供のことごとくもお好きなかただつたのでしょう。この人物は、私とあれこれ話すことに疲れを知らず、飽きもしなかつたからです。私と話をするときの様子や態度を今、思い返してみますと得心が行くのですが、この有徳のご老体は私にすっかり心を奪われていたのです。数日でも「私に」会わないものなら、お付きの人を遣わしてお招きになり、何くれと機嫌を取りながら懇談を始めたものです。奥様はポヤール<sup>⑨</sup>の令嬢であつたといいますが、奥様と私どもとのお付き合いはさほど親密なものではありませんでした。このスキン氏と過ごした時間は今も目に浮かぶようです。私の幼年期の最も甘美な部分と言えましょう。立派な客間がありまして、中央のテーブルの前には巨大なワニの剝製が横たわつてお

りました。この恐ろしい剝製を、私は怖がりませんでした。その客間でスキーン氏と向かい合って座り、懇談したものです。ある日、私は懇談中に言葉を途切らせ、ほんやりとスキーン氏の顔を見つめました。ご老体はこれを不審に思い、わけを尋ねました。私はキリスト教徒のことをつい庶民の下賤な言い方で呼んでしまい、「不信心者<sup>キヤイツル</sup>どもは地獄で焼かれることになつていくといひます。あなたも不信心者でしょう。私はあなたのごが大好きなのです。焼かれてしまうなんてあんまりだわ」と言つてしまいました。そればかりか、このように言つた後、泣きながらこの御方の首にすがりついたのでした。彼は私を何とかなだめました。しばらくして彼が父と面会したとき、小さな子供にそのような誤見を吹き込むものではないと、至極まっとうな言い分で忠告したそうです。ある日、スキーン氏のお宅に母と一緒に参りました。ご存じでしょうが、かような場所にもスリムの奥方連中が出かけるるとき、男性は姿を見せません。領事夫人は客人たちを丁重にもてなすことに忙しかつたので、私をご亭主のもとに連れていくことも、送り出すこともできませんでした。やがて帰宅すべく馬に乗る段になつて、スキーン氏の召使が駆けてまいりました。彼は母に向かつて、「申しわけございません。わが主人は今日、お嬢様にお目にかかつておりません。お会いできずにお帰しすることに、どうにも納得できない様子なのです」と告げ、私を抱きかかえて主人

のもとに連れていきました。私にはこれがたいへん嬉しかつたので、召使に抱えられて行つたときの様子を今でも覚えていゝのです。くだんのスキーン氏は白い口髭を蓄えたかたでして、イスタンブルに滞在した際には、今は亡きアフメト・ヴェフィク・パシヤ<sup>⑩</sup>とも面会し、懇談していたそうです。

かくて、ファトマ・アリエウ女史の幼年期の初めのころの思い出は以上のとおりである。彼女はアレッポにいたときの様子や、そこからイスタンブルに帰還して五歳までに経験した諸点は完全に覚えていたのだが、文字を読むことをいつ、どのようにして習いはじめたかについては、いっこうに思い出せないという。かくも大きなご家中には、たいてい指南役<sup>ナツヤ</sup>がいて、その家の子女、また家子同然の召使の少年少女、さらには当家に仕える大人にさえも勉学の手ほどきをしたものであつた。イスタンブルに帰還した後、ファトマ・アリエウ女史も正式に教育としつけを受けるべく、当家の指南役でロフチャ<sup>⑪</sup>出身のハジュ・イブラヒム・シエウキ・エフェンディに託されたのだが、彼はこの五歳の子供が授業の早い段階で文字を覚えてしまい、それを読み上げようとする様子を目にして仰天したという。

なるほど、一見したところ驚くべきことのようにはあるが、当人と当人の状況を調べてみれば、さほど驚くには当たらない。くだんの指南役シエウキ・エフェンディは、アレッポにいたときにも当家

の指南役であったのだが、大勢の児童を教授する際に、ファトマ・アリエエ女史を楽しませようと彼女も授業に同席させたそうである。かかる次第で、ほかの子供たちにおこなわれる授業を聴いているうちに、彼らよりも当人のほうがよく学び覚えてしまったのだが、こうしたことは子供にはよくあることである。われわれの児童にも見られたのだが、年長の子供たちが苦勞して音符のソルフェージュをおこなっているかたわらで、三、四歳の子供たちがそれを聴きながら音符の名前と音をめぐりに諳んじ、歌っていた。やがて、彼らは年長の兄弟たちとは比べものにならぬほど迅速かつ容易に音楽を修得してしまつたのである。

子供についてこのように実施される教育心理学的調査は、まことに驚くべき重要性を帯びている。われわれは、二歳から五歳までに三つの言語を一時に学んでしまつた子供たちを知っている。これは決して学習の成果ではない。つまり、これらの言語は授業その他の形態で子供に教えられたものではないのである。逆に教えられることと言えば、「アブ、ママ、ジジ」といったたくさんの幼児語なのであって、これらは子供にとっては学習というよりも模倣の對象に過ぎない。子供がやがてこうした言葉の稚拙さを悟ると、言葉の正確なかたちを学び取る段になる。然り、これをわれわれは「学習」と呼ぶ。つまり、子供は耳にしたことどもに注意を払いながら、それらを自分で覚えていくのである。また、そもそも好奇心旺盛な子供たちは、何でもかんでも千の物事を大人に尋ねて答えをせ

がむものなのだが、もしも大人の側にわずかなりともベダゴジツマリ教育学についての心得があれば、「子供だから」などと言って邪険にせず、子供の尋ねることに真摯に答えてやらなければならぬ。なぜなら、子供はそのとき覚えた事柄を二度と忘れなければならぬ。なげかりにまちがって覚えてしまつてあとから忘れなければならなくなつた場合、もちろん相当努力しなければ忘れることができな

いからである。

ファトマ・アリエエ女史には、当人よりも年長の令兄がいる。すなわち、現在は国家評議会の委員の一人であるところの栄えあるアリ・セダト・エフェンデイであり、江湖に供したご高著によつて言論界でも名声を博している。また、彼女より年少の令妹（エミネ・セミイェ）もいる。これらの人びとや家中の家子郎等の子女のために、上述のように教師（イブラヒム・シェヴキ・エフェンデイ）がいたのだが、この教師は子供たちを教授育成するよりも飽きさせないようにすることのほうに忙しかつた。それでも、アリ・セダト・エフェンデイの教授育成の件にはもつと真剣かつ慎重なかたちで取り組む必要があり、他方でファトマ・アリエエ女史は令兄にたいへんなついていたので、いつも令兄と連れ立つて授業を聴いていたという。こうして五歳のうちに聖典（クルアーン）の読誦を終えてしまい、まもなく『ムズラクルの教理問答』や（イスラームの預言者ムハンマドにまつわる）『聖誕』といった、トルコ語で書かれ、かつ母音符号付のナスフ体で印刷された諸書も難なく音読できるよう

になったそうである。

今は亡きジェヴデト・パシヤから伝え聞いたところによれば、アリエ女史がまだ六歳であったある日のこと、ご母堂がそのように母音符付の文字で印刷された書物と一緒に、このかわいらしい読書家の腕を引き、「アリエはこんな本を誦めますのよ」と言いながらご尊父の前に連れてきたという。今は亡きジェヴデト・パシヤは本の数カ所を開いて子供に音読させ、その歳で身につけた読誦能力に大いに満足したので、褒美に一つかみの金銭を与えた。だが、どうしたわけか子供はそうして褒められることが気恥ずかしく、あるいは気後れして逃げ出してしまったという。ご尊父のほうは、その様子を一種の驚異と考へ、呆気にとられたそうである。

われわれは児童教育に長年携わってきたので、一部の子供たちがこれほどまでに才能を開花させたとしても何ら驚くには当たらないものと考え。それどころか読者諸賢は、史書に登場する著名な学者や文筆家のうち、イブン・ハージブ<sup>15</sup>やヴィクトル・ユゴーのように、まだ幼いころから文才や学才で名を揚げた人士を思い起こしてみれば、彼らに比して六歳の子供が母音符付の文字を正しく音読できることなど驚きもしないであろう。言うほどのこともないのだが、このくだりを書いているうちに、わが家の子供の一人である愛しのズイーバーのことを思い浮かべてしまった。<sup>16</sup>彼女はやつと七歳を過ぎたばかりにもかかわらず、母音符合の付されていない文字を適切かつ正確に音読することはもちろん、音節を一つずつ区切りな

がらはつきり発音してあげれば、正書法に沿ってまちがわずに書き取ることのできるのである。

とはいえ、わが家のズイーバーはたいへんなお転婆で、人形劇やお人形遊びのほうに夢中なのだが、ファトマ・アリエ女史の幼年期はこれに比すべくもなかった。彼女の親戚連中が言うには、この聡明な子供はほかの子供たちとは別格だったそうである。玩具が嫌いな子供などいないはずなのだが、当人は子供や玩具と遊ぶことがまったく好きになれなかった。また当時、大臣たちの家には大勢の演奏家や歌い手がいて、彼らに稽古をつけるべく親方連中がやって来ることになっていた。そして、親方連中がやって来ると「集団稽古」という名のもとに素晴らしい演奏会が催されたのだが、アリエ女史はこれもお気に召さなかった。彼女が真に関心を持っていたのは書物であり、どこかで書物を見かけようものなら、それをしてみたいという欲求をどうしても抑えることができなかった。だが、ほかの子供のように手に取ったものを壊したり、汚したり、破ったりするというわけではない。また、持ち主の許可を得ずに何かを手にも取ることもなかった。そのころ、今は亡きジェヴデト・パシヤの屋敷には、同郷者や親類縁者の一部の人がとが足しげく出入りしていた。そうした人びとのなかには高等学校の生徒や司法省その他の部局に勤める者がいて、邸内には彼ら専用の部屋があり、その部屋には彼らの文書や書物があった。そこで、われらが幼気な探究者は、これらの書物を持ち主に断って手に取ることに無上の喜び

を感じていたのである。

もはや幼年期を脱して少女期に入らんとしていたこの時期にあって、つまり七歳のときに、彼女は書物への関心の赴くままに『パツタル・ガーズイー』や『血の砦』<sup>18</sup>、それに鉛活字で印刷された『アズイズ・エフェンデイの空想物語』や『千夜物語』<sup>20</sup>などの書物も自在に音読できるようになっていた。とはいえ、その意味内容まで理解することはできなかったもので、やがて自分が読んだものすべてについて、それが何を言わんとしているのかを理解したくてたまらなくなり、あれこれと尋ねて回るようになった。というわけで、くだんの女史について、ここからは幼年期の章で考えるのではなく、少女期の章で考えることにしよう。

## 二、少女期

自分が音読したものを理解しようとしておこなった探究から生じた収穫を、ファトマ・アリエエ女史自身の説明するところから察するに、凡人は「ここに書かれていることは何を言わんとしているのか」ということを気にかけて苦心の末に理解に達するものなのだが、ファトマ・アリエエ女史は「この意味、この内容を、はたして筆者はいかなる文章で綴り、説いているのか」ということを気にかけて読み進めるうちに理解に達する女性のようなのである。というのも、『千夜物語』や『アズイズ・エフェンデイの空想物語』といった物語作品を彼女に聞かせてあげようと買っただけの人びとは、それ

らを物語マヤナリとして聞かせてあげるのだが、彼女は物語（の筋）を理解した後、その話が掲載されている本のページを読んで、それが自分に理解可能な文章かどうかを吟味するのである。

一見したところ、こうした学習の手順はあべこべのように見えるが、しばし熟考してみれば、本邦のオスマン語を理解する道は、まさにこうしたやり方でこそ容易に見つかり、開かれるものであることに首肯せざるをえない。なぜなら、「意味」<sup>メアール</sup>ないし「内容」<sup>ミユフアイド</sup>と呼ばれるものは子供にとって未知のものにほかならず、その未知のもの何たるかを、別のたくさんの未知のものたる単語や文章のなかに求めることは、もちろんさらなる困難をもたらすだけだからである。だが、その意味や内容があらかじめわかっているならば、それらがどのように表現されているかを確認すべく、それを単語や文章のなかに探ることもずっと容易になる。およそそれわれわれ全員が身覚えのあるように、アラビア語やペルシア語の文章や二連句の意味をくみ取ることは、はじめのうちはたいへんむずかしいものだが、その文章や二連句の意味するところの何たるかを学んだあとで再読してみれば、言葉の意味の真相にみごとに達するものである。

ファトマ・アリエエ女史がまだ完全には幼年期から抜け切らず、といって少女期にも入り切っていなかったころでさえ、彼女の学習に対する意欲と情熱はたいへんなものであった。それがどれほどかと言うと、学のある人の食べ残しを口にすると学のある人間になれるなどという話を耳にして、純真な子供心ゆえにそれを真に受けて

しまつたくらいである。だが、学のある人としてだれを選び、その食べ残しを口にしようかという段になって長らく思案した末に、ご母堂のもとに足しげく通い、「女先生」<sup>ホシヤハナヌ</sup>と呼ばれて邸内で敬意を払われていた女性を「これぞ学のある御方！」と見定め、その食べ残しを口にしようと懸命に努力を傾けた。この努力がいささか昂じてしまい、女先生に朝食<sup>カフツアルトク</sup>が供されるときにその食べ残しにありつこうと、長いあいだ広間をうろついて朝食の盆が下げられるのを待つていたそうである。

指南役のイブラヒム・シエヴキ・エフェンディがおこなう音読の勉強において、ファトマ・アリエ女史は驚異的なたちで上達し、指南役を少しも倦ませることがなかったばかりか、同じく書字の勉強においても、そのようなして驚くべきたちで上達し、やはり師を倦ませることがなかった。さて、イブラヒム・シエヴキ・エフェンディの字はタアリク体<sup>21</sup>に近いものであり、くだんの女史が書字を始めたとき、この書法で書かれた手本が当人に与えられたのだが、子供がその手本にならつてタアリク体を身につけることはなく、ルクア体を身につけてしまった。手本に見えるタアリク体のバー(ب)やター(ت)やサイン(س)やカーフ(ك)の文字をふつうよりも長く伸ばして書くカシータ<sup>22</sup>が好きになれなかったこの生徒は、これらをルクア体のやり方で書いていたのだが、指南役の先生は「それもよし」として少しも嫌な顔をしなかったそうである。子供にしてみれば、ルクア体とは何か、ナスフ体とは何か、タ

アリク体とは何か、などと知ったことではない。ただ、自分のそばで文字を書いている人の書き方を一生懸命まねたがために、そうして書くようになってしまったに過ぎないのである。あとになつてもともと乳父(乳母の夫)であつたが当人の守役も任ざれていた古参の人物の息子が、みごとにルクア体の書き手だったので、アリエ女史に手本を書き、乳父にして守役が見守るなか、子供の字を正そうとしはじめた。指南役のイブラヒム・シエヴキ・エフェンディは、いっこうに頓着しない人柄だったので、自身の職責に加えられる越権行為ゆえにも申すこともなかった。

この指南役のシエヴキ・エフェンディには、ほかにもいくつか風変わりなところがあつた。その一つは、アリエ女史に算術の初歩を教えようと努めたことである。伝えられるところによれば、この御仁は若いころに習い覚えた諸学問をのちにすべて忘れてしまい、忘れたがために出世の道を進むことができず、ジエヴデト・パシヤのお屋敷に居候することになったという。とはいえ、算術のうち簡単な四則演算は忘れずにいたにちがいない。子供ながらに熱意と誠心をもつて知識の純水を渴望していた年若の生徒に、それをみごとに教えることができたからである。

御父君たる(ジエヴデト・)パシヤのご家中に連なる人びとのうち、こんにち司法省の頭官の地位にあるさる御方も、ファトマ・アリエ女史の教育係の一人に名を連ねている。彼は当時、パシヤの文書を記す任を務めており、その関係でお屋敷に頻繁に出入りして

いたのだが、くだんの女史の呑み込みの速さにすっかり魅了された。そして、彼女がかくも年少で読み書きができるというので、この人物も教育熱に駆られ、くだんの守役の任を務める乳父が見守るなか、正書法の手ほどきを始めたのである。ファトマ・アリエ女史がこの手ほどきから受けた恩恵は、たいへん大きなものであった。なぜなら、短期間で正書法も上達し、当人に書かせたものにはとんど誤りが見られなくなったからである。思いを致すべきは、教える側の熱意と教わる側の意欲とである。くだんの御仁はアリエ女史にフランス語の数字も教えたのだが、彼女はすでに習得済みの演算を、以後はその数字でおこなうようになり、これは言うなればフランス語に初めて親しむ端緒とも見なしえよう。

七歳をまだ過ぎぬうちに、ファトマ・アリエ女史はご母堂の私的な代筆を務めるようになった。そしてご母堂が、地方にいる友人に送る手紙をこの文字を覚え立ての代筆に書かせるようになったことは、まことにもって驚くべき上達のほどを示している。また、令兄アリ・セタト・エフェンデイも令妹のかかる能力に感心し、書物を片づけるときに手伝わせていたという。彼が告げた書名をアリエ女史が表紙から読み取り、持ってきて渡すご褒美に、彼は自分に用がなくなった新聞や雑誌のたぐいをあげたそうである。ファトマ（・アリエ）女史はそれをたいへん興奮して受け取り、読んだものであった。

けだし、この状況がたいへん重要なのは、それによって以後、彼

女が書籍や新聞を購入する必要を感じるようになったからである。屋敷には生活や娯楽に必要な物がすべて調えられていたが、そのほかに小遣いとして保母に一週間当たり三〇クルシユが預けられていた。<sup>24</sup>くだんの保母は、この金銭で子供が欲しがるあらゆる新聞や書籍を入手し、そうして購入することにたいへんな喜びを感じていた。なぜなら、彼女は自分が手塩にかけてしつづけている少女をこの上なく愛しており、少女が読んだり書いたりすることをたいへん好ましく思っていたので、この点で反対するどころか何くれと世話を焼き、手助けまでしてくれたそうである。

ファトマ・アリエ女史の教育に最も真剣なかたちで力を尽くした人物は、今は亡きホジャ・ムスタファ・エフェンデイであった。われわれにとっても恩師にあたるくだんの故人は、その知見の広さは言うに及ばず、学識の深さにおいても申し分のない御方であった。<sup>25</sup>令兄にたいそうかわいがられていたファトマ・アリエ女史が、ある日、彼のお部屋にいたとき、令兄は「はたしてできるかどうかわからないけれど、この本の一ページでも読んで諳んじられるようにがんばりなよ」と言ってアリエ女史に一冊の本を渡したそうである。それは、二人のご尊父がものした『トルコ語文法読本』なる書物であった。<sup>26</sup>まだ七歳であったファトマ・アリエ女史は、この書物を何度か音読して完全に覚えてしまい、その状況を令兄に伝えた。彼は「ぼくは今すぐ覚えるとは言わなかったんだけどな。いつでも覚えられるときに、と言ったつもりなんだけど。とにかく

聞いてあげるから、こっちに来て暗誦してみなよ」と言つて、彼女が暗記しているという講を聴いてみた。彼女が学校の生徒と言つてもよいほどにすらすと語んじるさまを見て、彼は驚愕した。彼の教育を任されていた今は亡きホジャ・ムスタファ・エフエンディが翌日の夕刻にやつて来ると、令兄は令妹を師の前に連れていき、ともに授業を受けたそうである。

くだんの師から彼女が受けた学恩を、ファトマ・アリイエ女史自身の手で語らせるべく、彼女のあらゆる著作の記述に垣間見える、かくも瞳目すべき叡智の片鱗を、だからかどのようにして手に入れたのかについて、以前に小生がおこなつた質問に対して、女史が返して寄こした詳細な書付を参照することしよう。そこには、つぎのように記されている。

ホジャ・ムスタファ・エフエンディは私にトルコ語文法の授業を始めた日、地図をかたわらに地理学の授業も始めました。その後は時刻に先生がお見えになるごとに、私をお召しになったものです。私は授業の予習を入念にしておりましたので、たいへん気に入られ、授業を先に進むことができました。どれほど意欲的に励んでいたかと申しますと、もともと好きではなかった遊戯やら何やらの余事にかまけることなど頭の片隅にも思いつく浮かばなくなつたほどです。授業内容を覚えたり語んじたりすることも苦ではありませんでした。そもそも先生が授業内容を

どれほどみごとに解説してくださつたかと申しますと、たとえ授業後に復習を怠つたときでさえ、私の記憶に残つて離れなかつたほどです。夏に私どもがボアズイチ（の別邸）に居を移しますと、先生は週に数晩しかお見えにならなくなるのですが、私どもがイスタンブル（旧市街の本邸）にいるときは毎晩やつて来て、就寝の時刻になるまで私たちを教えてくださつた後、供の者に灯火を持たせ、さほど遠くもない自宅にお送りさせたものでした。この御方は、そのころ兄が通つていた学校で最も偉大な先生がたのお一人だったので、のちにその学校には「官員養成校」という名が付けられました。私は当人を敬愛しておりました。ですが、敬愛するのと同じくらい畏怖してもいたのです。雪のように白く清潔で小さなターバン、いつも清潔で新品同様に見えた法衣ジュズベ、そして、長身にして白哲、典雅にたたずむお姿とともに、この祝福された御方の光り輝く御顔が私の眼前に浮かびますと、それに対して今でも居住まいを正してしまふほどです。新思想の持ち主のなかでも、ことに進歩的な御方でした。私に『無二の真珠』<sup>(20)</sup>も講じてくださいました。ただし、ご本人の撰に従つて、私に講ずる必要のある箇所を講じてくださったのです。また、その教学に関する点については『無二の真珠』をひとまずの土台にしつつ、ご自分で必要な知識をほとんど口頭で教えてくださいました。あれこれの迷信や俗信、またイスラームのシャリーアや学知に悖る妄念を、

私の頭のなかから消し去ることに力を傾けてくださいました。かくも大事で繊細なことどもを、子供にも理解できる平易な言葉で説いてくださったので、私は飽きことも嫌になることもなく、むしろたいへん満足したものです。彼の学識と美德、知恵と知識は、父も讃えておりました。こうして、私は七歳のときにこの御方の学恩を受けるようになったのです。教授は三年続きました。それ以上は彼の寿命が許さなかつたのです。彼はこの間にオスマン語文法をしっかり教え込みました。地理学を完璧に習得させました。さらには歴史を地理学に関連づけて教えてくれました。地図を見せながら、ある土地の地勢を説明するときに、彼は当地の歴史の概略も私に語って聞かせるのです。私たちは地理学を終えると天文学の勉強に移りました。私はさつそく地球と天体の回転と運行、また恒星と惑星をすべて学んでしまいました。地理学や天文学が私に教えられたように教えられている場所など、いまだに見たことがありません。夏と冬が交互に訪れること、また夜と昼が長くなったり短くなったりすることなどがどうして起きるのか、すべて説明できるようになりました。オスマン語で意思表示するためにアラビア語やペルシア語をどのようなかたちで援用すればよいか、「アラビア語の」語形変化表や語根論やペルシア語文法やを示すことなく、先生は私にみっちり教え込んだのですが、これは文法論や構文論を十分に修得した人でも長期間勉学に励んだ末

にやっと使いこなせるようになるほどのものでした。あの御方がお亡くなりにならなかつたなら、私は当人からもっと多くの学恩を受けていたことでしょう。私はご逝去に際してたいへん悲しみました。まことに厳肅な御方でした、私と戯れることなど皆無でしたが、悔ることもありませんでした。

賢明な生徒に対して学識と熱意のある教師が三年間で何を教えることができるか、当今の学級制の状況と比べて評価することはできない。なるほど、当今の本邦の高等小学校などでおこなわれる授業の進度はやや遅めではあるが、考慮すべきは一学級に六〇人から一五〇人ほどの生徒がおり、教師は彼ら全員に向けて一斉に授業をおこなわなければならない点である。先生の説明を聞いていない子供も多い。ときどき試験をするほかに学力を点検するすべもない。中級の生徒が理解するまで、上級の生徒は待たされる。したがって、学級に対して斉一的におこなわれる授業と比べた場合、一人の教師が一人の生徒におこなう授業とのあいだには教段の違いがある。これは、われわれ自身が経験的に知っていることでもある。個別指導のかたちで受ける三年間の授業に、一斉指導のかたちで受ける六年間の授業ほどの成果が見られることは明白である。

今は亡きホジャ・ムスタファ・エフエンディの授業は、アリエエ女史に対してこのように知識の欠如を補うだけに留まらなかつた。基礎となる考え方やもの見方を広げ、正すことに力を尽くしたの

である。実際、そのことをくだんの女史はみずからの筆でつぎのように物語っている。

奥向きにいるとき、私は母の部屋以外の場所には行きませんでした。というのも、年配の女性たちの話や古い時代の物語を聴くのがたいへん好きだったからです。ところが、ある日、母たちが「最後の審判の時だわ！ この世の終わりが迫っているぞうよ。悔悛の門は閉ざされるでしょうに。そのあとにおこなつた悔悛は受け入れてもらえないでしょうから、人びとは地獄に行くことになるでしょう」などとわけもわからぬことを言っているのを耳にして、私はひどくうろたえてしまいました。先生がお見えになって、この件をご本人にお話しするまで、私は居ても立ってもいられませんでした。先生は私の説明を聞いた後、たいへん珍しいことに微笑みながら、つぎのようなお考えを示してお返事をくださったのです。「娘よ、さような話はこの世の初めからずっと言われつづけてきたものです。実際、偉大なる諸書に記されているとおり、真理者たる御方〔唯一神〕がアダム様をお創りになったとき、大天使たちが《「神は」土塊からかような存在をお創りになった。これはどうしたのか。この世の終わりの兆しにちがいない》などと驚きを表明したではありませんか」と。このお返事は子供が理解できるほどに単純ではありますが、哲学者をも唸らせるほどの説得

力を備えています。

かくて知識のみならずもの見方や考え方の面でも、ファトマ・アリエエ女史は今は亡きホジャ・ムスタファ・エフエンデイからたいへん大きな学恩を受けたので、彼の逝去ゆえに抱いた悲しみを今も思い出すたびに、彼女が恩義と畏敬の念を深くするのも至極もつともなことなのである。

この高貴なる御方が亡くなった後、かの聡明にして熱意ある学知の探究者を教育する務めは、以前に申し述べた人物（イブラヒム・シェヴキ・エフエンデイ）に委ねられた。彼がそれ以前にもこのような務めを経験していたからである。もう一〇歳になり、理解力も増した自分の生徒に対して、くだんの教師は書道よりも作文の勉強となすべく、例のみごとな（タアリーク体の）手本を与えたのであった。彼女は数行に満たない手本をみな諳んじてしまい、種々の文章作法を一举に習得してしまったという。その上、しばらくして、この手本の重要性はいつそう高まった。ヨーロッパの婦人とイスラーム教徒の女性とが身につけている常識の違いや、外国人の慣習と本邦のイスラーム教徒の慣習との比較といったことどももこの手本に交じりはじめ、それゆえ、これらの一つ一つが倫理学や哲学の読み物のかたちをとるようになったからである。女史がこの授業から学知の面で受けた恩恵は計り知れぬほど大きかったが、書字のほうはどうにも性に合わなかったらしく、その面で上達することは

なかった。書く内容をすばやく走り書きすることは今も彼女の習癖のなせる業のだが、彼女が一人で執筆した文章の説明のしかただとか、そこに記された見解の緻密さは、当時にあつてさえ、敬愛する師から愛でられていたそうである。

さて、ファトマ・アリエエ女史にフランス語を学びたいという欲求が兆したのも、この一〇歳のときのことであつた。彼女はこんにち、たいていの本邦の男性が話すほどにフランス語を話し、ほとんどの人よりもよく理解している。そこで、これをどのように習得できたのかについて、以前にわれわれがおこなつた質問に答えて、彼女は以下のような文章を書いて寄こしてくれた。

フランス語を学びたいという欲求も一〇歳のころに兆しました。とはいへ、この欲求をおおやけにすることなどできません。うか。当時、女子にフランス語を学ばせることは、まだ一般的ではありませんでした。ほんの一、二の家を除いてムスリムの家庭であればどこであれ、それを認めることなどなかったのです。私どもの家もまた、それを認めぬ立場にありまして、たとえば母でさえ私がフランス語を勉強している姿を見とがめようものなら——神よ、決してお見せにならぬように——私が宗旨を変えてしまつたとしても言わんばかりに事態を重く見て、それを阻止すべく、できるかぎりの手を尽くすにちがいないことは目に見えておりました。私どもには、家族の女性のあいだにも

フランス語が浸透していた家庭とお付き合いがありました。その家族の二人姉妹と親しく会つておりましたので、私は二人がフランス語を学んだり、絵画を作成したり、ピアノを稽古したりする様子をうらやましく眺め、彼女たちと時を過ごすことが楽しくてしかたありませんでした。かかる次第で、フランス語を学びたいという欲求が私の胸中でどれほど大きく膨らんだかと申しますと、もはや自分自身でそれをどのように説明してよいのかもわからなくなつてしまつたほどです。手に入るフランス語の新聞を期待に満ちあふれながら眺め、文字のかたちを食い入るように目に焼きつけては頭に刻みつけておりました。しばらくして文字のかたちをすべて覚えてしまいました。たとえば、「a」の文字に似ているものをすべて見つけて仕分けていつたのですが、それらの文字が何という名前なのかも、どのような性質のものなのかも、まだ知らなかつたのです。私の胸中にあるこの欲求は、あたかも一つの愛のごとくに達しました。フランス語の入門書アルファベを手にすることが、もはや私にとつては夜の夢にさえ出てくるほどの熱愛も同然のものとなつたのです。私はこの願いが叶わなければ本当に正気を失つてしまうものと思いつめ、ままよとばかりに意を決して事態を乳父に打ち明けました。だれにも告げぬようにと何度も懇願して釘を刺し、入門書入手するように乳父を説き伏せることができました。二、三日し

て、彼は絵入りの素敵な入門書を持ってきてくれました。その日以来、私は自室に閉じこもり、だれにも見られぬようにしながら、その本の第一講にじっくり取り組みはじめました。決して大げさだと思わないでいただきたいのですが、私は四日間ずっと、何もわからぬまま、その本のページをにらんでいたのです。何もわからぬまま、それほど執拗にがんばるとは、何とも滑稽なことではありませんか。私はだれかに文字について尋ねることを恐れていたのです。かくも無害なことのために、いったいどうして恐れることがありましょう。それもこれも子供時代のなせる業なのです。しばらくして、女子師範学校（ダイル・カッリマート<sup>33</sup>）の女性教師であったレフィカ・ハヌムが、そのころ「イスラームに」新規改宗し、私どものもとに通ってくるようになりました。御夫君の今は亡きサードウク・ベイは陸軍士官学校（メクテビ・ハルビト<sup>34</sup>）にお勤めで、ご自宅には週に一度お戻りになるだけでしたので、レフィカ先生は私どもにピアノの稽古をつけるべく、週に二、三日ほど私どものもとで過ごしておりました。私はこの御方にも心酔しておりましたので、夜な夜な就寝の時刻まで私の部屋と一緒に時を過ごしたものです。そうです。そのとき、私には専用の部屋があり、自分の勉強机や書棚まであったのです。私どもがおしゃべりをしているあいだ、私はレフィカ先生から折に触れてたくさんのフランス語の単語を学びました。思いつくかぎりの事柄に対応するフランス語を尋ねて覚えたのです。実は

彼女の母語は英語でして、フランス語は少ししか知らなかったのですが、それでも私が尋ねた単語を彼女は教えることができました。このようなかたちで、私はフランス語のたくさんの単語や言い回しを覚えてしまったのですが、読み書きの点では一文字たりとも知るところがありませんでした。私が入手させた入門書は、決して人目に付くところに放っておかず、夜は自分の引き出しにしまつて鍵をかけておきました。製本しないように頼んでおいて、昼間は二つ折りにしてふところに隠しておきました。そして、一人になったときにはいつでも、その本の最初のページを眺めていたのです。かかる次第で、一文字たりとも学ぶ機会がなかったのです。子供が耐え忍ぶにはあまりに長いと言わなければならぬほど思案した末、私はついにかくも厄介な悩みをレフィカ先生に打ち明ける決心がついたので、何よりもまず、この秘密をだれにも告げぬようにと固く誓わせた後、思い切って打ち明けました。はじめにレフィカ先生は「何か不都合がありませんか？」と言って私の要望にすぐに賛意を示してくれたのですが、私はフランス語を習う娘たちのために屋敷に異人の女性が入りしななければならぬことに注意を促して、これにわが家ははなはだ都合が悪いことを説明し、このむずかしさを説いて聞かせました。レフィカ先生はこの差し障りのほどを理解し、ご自分で私に密かに文字を教える労をとると約束してくれました。私どもはことに取りかかりまし

た。主よ、何たることでしょう。彼女の教えを私は何と速やかに学んだことか。人間たるもの、かくも切に望んだ事柄をどれほど苦もなく学ぶことができるかを、私はこのようなかたちで実際に体験したのですが、かくもまざまざと体験することに成功した人もいないものと思います。庭に私専用のブランコがありました。ブランコは好きではなかったのですが、その上で入門書の勉強を安心しておこなうことができましたので、ついにはブランコから降りてこなくなりました。さて、ある日のこと、庭で勉強した後、例の本をふところにしまいのを忘れてしまい、本を手に携えたまま、いつもは人気のない広間を通り過ぎようとすると、父が目の前に現れたではありませんか。主よ、何たることでしょう。私はここでどうせよというのです。うか。本をふところにする時間はありません。私は腕をすばやく回して本を長衣エンコウの裳裾のあいだに隠そうとしました。ですが、ことは遅きに失しました。父は私がものを隠そうとしているのを見逃さなかったのです。彼が私のそばにやつて来て「何かね、それは？」と質問したとき、私は彫像のように立ちすくんでしまいました。父は質問を繰り返しました。何も返事をする事なく、私は例の本を取り出して見せました。それをどこで見つけたのかと尋ねられると、私はますます動転してしまいました。それもそのはず、この本は私に何の用がありません。もとよりフランス語を学ぶ者のもとにあつてしかるべ

きものなのです。もはや、すべてを白状せざるをえなくなりました。本の開いた部分は、単音節が印刷されているページでした。父の言いつけに従つて、私はそれを読み上げました。父は呆氣にとられました。どうなるかもわからずに下される判決を待つ殺人犯のように、私は彼の顔色をじつとうかがっていたのですが、父は不意に「それなら、おまえにフランス語も習わせてみようじゃないか」と言つたではありませんか。信じられぬ言葉が耳に入つてきたのです。ですが、その父の言いつけが本気のものであつたことは、翌日、母がその言いつけを必要な筋に伝えたことで確かなものとなりました。それにしても、私どもがあれほどまでに感じた恐怖とは、いったい何だったのでしょうか。

ファトマ・アリエ女史のフランス語の教師に任命された人物は、われらがオスマン帝国の諸学校で弁護士と医師の免状を取得するとともに、数々の有益な著作によつても確かな資質を証したイルヤス・マタル・エフェンディ34である。かかる才子が尋常ならざる女子生徒をいかに教授したかについて、ここで若干の説明を加えておかなければなるまい。なぜなら彼は、くだんの女史が一〇歳のときから一三歳になるまで三年以上にわたりフランス語を教授したからであり、ファトマ・アリエ女史のほうはこの授業から単に言語を学ぶだけでなく、思考力を伸ばす点でもたいへん大きな学恩を受け

たからである。

イルヤス・マタル・エフェンデイは、くだんの女子生徒が修得した勉学の水準を把握した後、フランス語の音読と作文の授業を同時に始めたという。当人は高等学校に通いながら、毎晩ジェヴデト・パシヤのお屋敷の部屋にやって来たので、授業なしで済ませる夜はなかった。読み書きが少し上達してくると、シャブサルの文法書の縮刷版<sup>35</sup>の勉強に取りかかったのだが、勉強の最も重要な面は動詞の活用にあつたので、努力の大部分もそこに注ぎ込まれた。続いて「カルファ」と通称されるポケット版辞書を用いて、『子供の鏡』(Miroir des enfants) という名の児童向け読本からささやかな翻訳をおこなう時間が設けられた。翻訳には、たいへんうまい方法が採られたそうである。すなわち、はじめに授業のなかで、生徒の知らない単語がどれほどあろうとも全文をノートに書かせる。つぎに、その書付を生徒が暗誦する授業がおこなわれる。その後、その部分を文法で学んだ規則に照らして解釈し、翻訳を作成したというのである。意欲的な生徒にどれほど授業をおこなおうとも彼女はたゆまず学んだので、イルヤス・マタル・エフェンデイは授業を一日二回に増やしたが、彼女がたいへん速やかに上達していくさまには彼も驚きを禁じえなかつたそうである。この教師は文法論や構文論の規則をしつかり叩き込んだばかりか、応用問題の演習にあたってもたいへん気を配つたので、四、五カ月のうちにファトマ・アリエエ女史はあれこれの言い回しを諳んじはじめ、いくつかの短くて理解の

容易な読み物を、手元の辞書を頼りに自分自身で翻訳するようになったという。一歳の子供にして、かほどの学習水準に達すれば言うことなしである。

そのころ、ジェヴデト・パシヤのお屋敷に数人の学校出の人士が足しげく出入りしていたのだが、そのうちの二人は、今は亡きパシヤがボスニアから連れてきて陸軍士官学校に通わせたとであり、休暇中の夜は邸内で過ごしていたという<sup>37</sup>。やがて将校になってからも彼らは屋敷通いを絶やすことなく、進取の気性に任せて大概の会話をフランス語でおこなっていたそうである。ところが、いかんせん彼らが繰り出すフランス語には誤りがあったようで、イルヤス・マタル・エフェンデイが正そうと努めるたびに、彼らは感謝するどころか憤激したという。ついにある日、イルヤス・マタル・エフェンデイは彼らに身のほどをわきまさせざるべく、ファトマ・アリエエ女史を呼び、彼らが話すいくつかの文を告げて、どのあたりにまちがいがあるか尋ねた。彼女が文法に即して訂正してやると、彼らは激昂し、イルヤス・マタル・エフェンデイとの議論は口論の域に達してしまった。子供は怖がって逃げてしまったそうである。

フランス語がそのようにして緒に就いた後、教授の技能における知見に申し分のなかつたイルヤス・マタル・エフェンデイは、オスマン語でいくつかの文章や物語を書き、フランス語に翻訳させようと生徒に渡すようになった。当初、この翻訳作業はアリエエ女史に

はいささかむずかしかったようであるが、短期間で努力と熱意を傾け、それも難なくこなすようになったそうである。だが、イルヤス・マタル・エフエンデイの教授は、ただフランス語だけに留まるものではなかった。彼は生徒にアラビア語の新聞の一部を読ませて翻訳させるとともに、彼が修得した諸学問のなかで、この一一歳の少女に教えるにふさわしい多くの雑多な情報を、その若い頭脳に叩き込んだという。今は亡きホジヤ・ムスタファ・エフエンデイやシェフイク（「ママ、シェヴキ？」・エフエンデイのように有能な教師たちが耕した彼女の頭脳に、イルヤス・マタル・エフエンデイが播種した叡智の花は、すくすくと育っていったのである。

ファトマ・アリエ女史がこうしてまだ一一歳だったころのこと、女子師範学校を次席で卒業した女性が、「アラビア語の」語形変化表と『ヴェフビー辞典』<sup>38</sup>の教授のために、われらが勤勉なる生徒の女性教師に任命された。ところが、この女性教師と女子生徒とのあいだに意見の一致が見られることはなかったという。なぜなら、女先生が生徒ほどに文章を書けず、オスマン語文法を生徒ほどに理解していなかったからである。生徒は地理学や地質学や天文学について語るのだが、女先生はこうした諸学には素人であった。生徒は『テレマック』の翻訳<sup>39</sup>を読んでアラビア語やペルシア語の単語の意味を解き明かし、さらには自分で書いたものなかでそれらの単語を使いこなしてもいたのだが、女先生はそれらについてほとんど知るところがなかった。それでも生徒は言いつけに従わなくてはな

らなかつたので、女先生が与えた『ヴェフビー辞典』と語形変化表を覚えることも怠らなかつた。だが、この教授も長くは続かなかつた。この女先生の代わりにイスケンデル・エフエンデイという名のイラン人が連れてこられ、女史のペルシア語の面での向上が期待されたのだが、どうしたわけか子供はこの人物を怖がってしまい、授業から何も得るところがなかつたという。この男は誠実な人間であつた。というのも、しばらくして教授をあきらめ、身を退いたからである。

アリエ女史がこうして一一歳であつたころの教師のなかに、この浅学菲才の筆者たる小生がいるのをご覧になって、みな驚かれるだろうか。なるほど、その事態はわれわれにとつても驚きに値する珍事に数えられるのだが、この点でおこなわれるべき説明を受けてしまえば、そこには何の不思議もない。けだし、その説明もたいへん愉快な私たちで明るみに出た。

すなわち、アリエ女史と私とのあいだに結ばれ、今は亡き御父君（ジェヴデト・パシヤ）も了承してくださつた心の父娘関係が誕生した経緯について交わされた手紙のやり取りのなかで、くだんの女史はたいへん賢明な私たちで言明しているのだが、心の父娘関係の重要性が実の父子関係に劣ることなど断じてない。実の両親が人間を物質的存在の世界にいざなう仲立ちをしなくてはならぬ、心の父親とはさしずめ精神的存在の世界にいざなう仲立ちということになる。当人の精神的存在にとつて最大の貢献をなしたのは、ど

うやらこの非才なる小生のようなのである。なぜなら、彼女は一〇歳のときから私の拙い著作を読みはじめ、読んだことをみな胸底にしまっていたからである。このことを、彼女はご自身の筆で以下のように描述している。

兄は自分用のたくさんの本の一部を私にくれたものです。そのなかには、貴方の「娯楽物語集」<sup>40</sup>もありました。読んでみましたが、これらは私がそのときまで読んだものとは別種のように感じられました。これらは私の頭を疲れさせることなく理解できるものだったのです。『千夜物語』や『千日物語』<sup>41</sup>などは別物です。『七人像』<sup>42</sup>と呼ばれる物語にも似ていません。「娯楽物語集」は私の思考に疲れをもたらすことなく、甘美な影響を与え、愉悅をもたらししてくれるのです。当時、私は作文の練習として親類の男性の一人に『テレマック』の翻訳を教えてもらっていたのですが、一頭の鹿の頭を洞穴から引き出すことを説明すべく何行も埋め尽くされた言葉から意味を取り出すことに努める煩わしさと、「娯楽物語集」の叙述形態に宿る明快さや痛快さから生じる楽しみを、まだ一歳の子供とはいえ、わからぬことがありませんか。私は「娯楽物語集」の一冊を乳父に見せ、これを書いた作者の著書をねだりました。彼ははじめに『最初の教師』<sup>43</sup>を持ってきてくれました。私がこれをどれほど気に入ったかと言いますと、そこに収載された幾何学

の図形を自分でがんばって描いていたほどです。当時、私は幾何学など何も知りませんでした。それまでに読んだ種々の教科書とこの本の内容とが別物であることはただちに理解しました。つぎに『船乗りハサン』<sup>44</sup>を読みました。私はこれがまったく別格のものであることに気づかされました。そこから生じる喜怒哀楽の感情は、その本を読み終えてからも消えるようなものではありませんでした。その小説のなかの出来事が何カ月も私の眼前を離れず、登場人物が私の目の前に浮かぶようになったのです。もちろん『船乗りハサン』の翻案元とされる『モンテ・クリスト伯』も読んでいたのですが、そこにこれほどの楽しみを見出すことはできませんでした。『モンテ・クリスト伯』の刑場の章がたいへんな恐怖を与えたので、その恐怖がよみがえらぬようにとの思いから、小説自体も覚えぬようにしていたのです。『船乗りハサン』のほうはずっと覚えていて、お気に入りの賢者たちについて語って聞かせられるほどでした。それ以来、『船乗りハサン』の著者が書いた本なら何でもあれ、それを入手してもらって読むようになりました。それらに熱中するあまり、食事をとったり睡眠をとったりすることすら厭うようになりました。おなかは減らず、眠くもならなかったのです。もともと読書に没頭することはたいへん好きだったので、それらの小説に没頭することは病的な域に達していたと言ってもよいほどでした。ただ『この世に二度生まれて』<sup>45</sup>とい

う小説だけは、さほど好きになれませんでした。反対に『ラーカム・エフェンデイ』<sup>46</sup>という小説は、ほかに比べようもないほど卓越しておりました。ですが、「万国史」というシリーズ名のもとに刊行された歴史書を読んだことで、私の勉学はまったく別のかたちをとるようになりました。私にはこの世の過去現在の様子を学びたいという素志があったのですが、ヨーロッパのような、あれほど輝かしき進歩によつて、私だけでなくすべての人びとの注目を集めている大陸にある国々の簡略な通史を目にして、それらを両の腕に抱きしめなくてはとしましう。「これを読めば、ヨーロッパについて聞いたり学んだりしたことを正したり補ったりすることができる」との思いで、私がかそれにかじりついた愛情と意欲ときたら、説明する言葉もないほどです。ついには『クルク・アンバル』<sup>48</sup>をも読むようになりました。主よ、何たることでしょう。これは何なのでしょか。まったくの別世界です。これについて説明したり考察したりすれば、たいへん長く遠くに及びます。なぜなら、その内容が私を長きにわたり惹きつけたからです。

かくて〔ヒジュラ暦〕一二九二年〔西暦一八七五年〕、つまり一三歳までのアリエ女史の経歴の概要と勉学の様子は以上のごとくであったが、この年、急にヤンヤ行きが出来したため、千人に一人の幸運な児童にもめぐってこないような、かくも充実した勉学

は、くだんの行旅ゆえに中断の憂き目に遭うことになった。その年、今は亡きジェヴデト・パシヤはヤンヤ州知事に任せられ、一族郎党をイスタンブルに残したまま、単身でヤンヤに赴いた。この別離はアリエ女史をたいへん悲しませ、彼女はたいそう泣いたという。だが、泣いているところをだれかに見られるのが嫌だったので、人目に付かぬ場所に引きこもり、一人で泣いていたのである。ついには胸中の悲しみを御父君に密かに伝えるべく、フランス語で手紙を書いた。この件が露見するや、そのようなフランス語の手紙を書けるほどの力が女史にあるとは思われなかったので、ご母堂はイルヤス・マタル・エフェンデイを奥向きの門口に呼びつけ、事情を聞いた。イルヤス・マタル・エフェンデイは、この手紙がアリエ女史自身の手になるものであること、そして決して悪い出来ではないことを申し述べるとともに、「お望みとあらば、奥様がトルコ語で何かおっしゃつてみてください。私がそれを紙に書き留め、アリエお嬢様にフランス語に翻訳させてご覧に入れましょう」と言ったそうである。手紙はジェヴデト・パシヤに送られた。その後、郵便を通して彼女のご尊父からご母堂に届いた手紙には、いくつもの喝采や祝禱や称賛の言葉が綴られていたという。それから六カ月後、今は亡きジェヴデト・パシヤは一族郎党をヤンヤに引き取りたいと望んだので、あれほどまでに進んでいたフランス語の授業やその他の勉学は中断してしまつた。

アリエ女史はヤンヤ行きのことを、ある手紙のなかでつぎのよ

うに綴っている。

春の季節のことですが、私どもはトリエステ郵船でイスタンブルを出立しました。兄も私どもと一緒に。トリエステ郵船の旅客は全員外国人でして、汽船の客室乗務員や高級船員のだれ一人としてトルコ語を解する者はいませんでした。たしかに女性の客室乗務員が一人おりましたが、彼女もトルコ語を解さなかつたので、私どもの一族郎党はだれにも意思を伝えることができずにいました。そのとき、私どものフランス語が役に立ったのです。母がフランス語の必要性を悟つたのも、このときのことでした。私は彼女の通訳を買って出ました。このお手伝いは母にたいへん気に入られました。私どもが搭乗した汽船はロイド社のエスベロ (Espiro) 号でして、それに乗ってコルフ島<sup>5)</sup>まで参りました。私はこの船旅を満喫しました。町に寄港するたびに、私は未知のものを新たに学ぶかのように胸躍つたものです。

女子に外国語を教える必要があるかどうかという問題は、今もなお解決を見ていない。また、その必要を認める者は認めない者に比べてごくわずかに過ぎない。だが、考えてもみよ。こんにちフランス語、英語、ドイツ語、さらにはロシア語のうち一つを男子に身につけさせることの重要性と必要性は一般に認められており、本邦の

諸学校の授業計画にも組み込まれている。しかるに今から三〇〇三五年前には、この問題にも厳しい反対意見があった。先見の明のある人びとはそれが必要であることを認め、本邦のフランス語教育のために保護者たちをいざない、「保護者たちは」そのいざないにしぶしぶ従つたものである。

けだし、最も経験豊かで真偽をわきまえ、かつ最大の説得力を有するものは時間<sup>ザイテン</sup>にほかならない。時間は極めて辛抱強く慎重に、しかも着実かつ持続的に、たくさんの真実について人間の思考を説得してきた。われわれがその成果をヨーロッパの新機軸のなかに見ている物質的進歩に参入するすが、言語の習得を措いてほかにないことは、われわれの目にも明らかなどころである。こんにち、女子児童に外国語を習得させる必要を証するにあたり、本邦では、ギリシア正教徒やアルメニア教会信徒やユダヤ教徒の女子児童におおむね外国語教育の必要性が認められていることを示したり、公人たる大官の家族が外国の公人たちと関係を取り結んでいることを指摘したりすることが一般的であるが、このやり方でどれほど長広舌をふるおうとも、女性が外国語を学ぶ必要を認めない人びとの見解を改める可能性は見出したい。とはいえ、その必要を認める本邦の上流人士も少なくない。こんにち、われわれは八〇から一〇〇ほどのムスリムの上流家庭を知っているが、彼らは女子児童にも外国語を学習させている。われわれの見解によれば、彼らは極めて適切にふるまっているのである。

コルフ島からヤンヤまでジェヴデト・パシヤのご家族がおこなった旅行について、われわれから補足しておく。当時、今は亡きパシヤは州内の巡察に出かけていたのだが、一族郎党がコルフ島にやつて来たとの報せを受けると、州の管理下にある官有汽船でみずからコルフ島に渡り、妻子を出迎えたそうである。別離ゆえにあれば彼女が悲しんだ父と、このたび再会が叶ったことで、アリエエ女史がどれほど喜んだかは言を俟たない。

ジェヴデト・パシヤ一家の今回の行旅は、イスタンブルを長期間留守にすることを強いはしなかった。「家族が到着してから」ひと月ほどの時が経過するかしないうちに、ジェヴデト・パシヤが公教育大臣に任命されると、一斉にイスタンブルに引き上げたからである。「往路の」汽船で見られた光景として、ファトマ・アリエエ女史がフランス語の会話に長けていることが御父君にも伝えられ、彼はたいへんご満悦であったという。そこで帰途、コルフ島で表敬訪問のためにやつて来たオスマン帝国の領事とフランス語で会話をおこなわせ、船中でもほかの旅客と「フランス語で」会話をさせて、むろん御父君はいつそう満足なされた。

ヤンヤに行き、そこから戻つてくると、今度はイルヤス・マタル・エフエンデイが帰郷のためにペイルートに行つてしまい、これはファトマ・アリエエ女史のフランス語の授業を長きにわたり滞らせる原因となった。それゆえ、イルヤス・マタル・エフエンデイがペイルートから戻つてきて授業を再開する必要が生じたとき、彼は

自分の生徒がそのときまでに習得したことを忘れてしまっているのではないかと懸念した。だが、はじめに実施した確認テストで見られた予想以上の結果は、彼を驚愕させるほどであった。どうやら、この中断期間中、ファトマ・アリエエ女史はジュエツザール・アフメト・パシヤとナポレオン・ボナパルトとの戦闘を描いた戯曲を入手し、くだんの女史はみな先生から教わったやり方で、まずは知らない単語を辞書で調べ、半分以上を訳してしまつたという。教師のイェルヤス・マタル・エフエンデイは、この努力の成果を見て驚き、かつ満足したのであつた。

ファトマ・アリエエ女史の教育係として数名の優秀な人物が任命されたことを、われわれは上記のとおり見てきたが、彼女自身とのあいだに交わされた頻繁かつ長きにわたる手紙のやり取りの結果から察するに、いずれの授業を始めるにあつても、教師たちは一人の女児、それも今から二〇年も前の時代の女児が本格的に授業を受けて学習するなど期すべくもなく、したがつて実際の授業も確たる結果を残そうというよりは、もっぱら実験のつもりでおこなつていたようである。というのも、たとえばイルヤス・マタル・エフエンデイのような真に聡明で優秀な教師でさえ、その素質を見込んだ生徒のために、目標を達成すべく必要となる教材を注文して調達すべきところ、そのとき字引としてアリエエ女史の手元には「カルファの辞典」と呼ばれて親しまれていた簡便な辞書（ペイルート）のほかに字引がなかつたからである。かかる次第で、いつそうしつかりしたフラン

ス語の辞書を入手した様子をアリエエ女史が手紙のなかでどのよう  
に物語っているか、見てみることにしよう。

フランス語を知っているということで、以前に貴方にご説明し  
た二人姉妹がおりましたね。ある日、私どもは彼女らの別荘に  
お泊りに呼ばれました。この二人姉妹の年齢は、たがいにつ  
ずつ離れていました。姉のほうは私よりも二つ上、妹のほうは  
一つ上でした。その日、私どもはフランス語でおしゃべりをし  
ました。妹のほうは「じゃあ、フランス語の本を読みましょ  
よ」と言って『ジル・ブラス物語』を取り出しました。私  
たちは読みはじめました。初見で知らない単語（の意味）を探  
るべく、彼女は手を伸ばして緑色の装丁を施された大きな本を  
取りました。その本はビアンキの辞書でした。私たちが探して  
いた単語は見つかりましたが、この本の詳細を目にするや、私  
はすっかり感じ入ってしまいました。単語の意味をかくも完璧  
かつ詳細に解説するような本が見つかるうとは思いませんかつ  
たからです。好奇心が炎のごとく胸中に広がりましたが、私は  
少しも顔色に出しませんでした。知らなかったことをおくびに  
も出さないように努めたのです。それでも、さらにいくつかの  
単語に目をやりました。こうして私はその本にじっくり目を通  
したのです。その後、私たちはフランス語の新聞も読みはじめ  
ました。知らない国の名前が出てきたので、彼女はまたもやそ

の本と同じ緑色の装丁を施された本を取って眺めました。私は  
ついに我慢できなくなり、それは何かと尋ねてみました。彼女  
がしてくれた説明から理解したのですが、この書物は四巻本で  
あり、二冊はフランス語をトルコ語で、もう二冊はトルコ語を  
フランス語で解説した辞書だったのです。「トルコ語をフラン  
ス語で」という言葉は私の興味をいたく刺激しました。トルコ  
語をフランス語で、ですって！ ということは、そのような本  
が手元があれば、トルコ語で書いたものをフランス語に訳す  
こともできるようになるでしょう。つまり、フランス語の勉強  
を進めるために我を忘れた状態になっていた私の悲願を、こ  
してその四巻本の書物が叶えてくれるのです。読書に勤しむこ  
とを終えた後、お友達の女の子が「さあ、お庭に出てお散歩し  
ましよう」と言いました。私はその緑色の装丁を施された本か  
ら離れたくはありませんでした。ですが、本への執着を表に出  
すことは私の自尊心が許さなかったので、お誘いに応じて庭に  
行きました。たぶん私をもてなすつもりで、彼女はたいへんお  
いしいブドウをもいってくれるのですが、一つ一つのブドウの粒  
がそれこそリンゴのように大きく感じられ、なかなか喉を通ら  
なかつたものです。私の気持ちは、緑色の装丁を施された本に  
あつたのですから。嗚呼、その本と私を部屋に閉じ込めてくれ  
れば、好きなだけそれを眺めていられるでしょうに。翌日、私  
どもは自分たちの別邸に戻りましたが、私の心はここにあら

といった有様でした。頭のなかも胸の内も、ビアンキの本に  
いての夢想、ビアンキの本がほしいという気持ちで満たされた  
まま戻ってきたのです。調べてみたのですが、それは四巻でハ  
リラだといいます。<sup>54</sup>ハリラ！ 何と途方もないことでしょう。  
一着の衣服を作るために私が少しでも無心するそぶりを見せよ  
うものなら、それ以上の金銭が支払われるものなのですが、異  
国の言葉の本のためにハリラもくれななどと、保母をどのよう  
に説得せよというのでしょうか。彼女らは私がフランス語を勉強  
することをよしとしなかったので、それに関する書物に手を触  
れることさえ望みませんでした。でも、保母のもとに預けられ  
ている金銭は私自身の金銭ではなかったでしょうか。私が指図  
すれば使えるはずなのです。ですが、そのときまで私は保母に  
命令口調でものを言ったことがありませんでした。ただし、保  
母とは教師にほかなりません。それどころか、保母たちのなか  
にはしつけを任された子供を打擲する者さえいるそうです。私  
は保母からそのような仕打ちを受けたことはありませんが、自  
分の悲願を果たすために駄々をこねたことさえありませんでし  
た。要するに、保母にも、母にも、父にも、その悲願をいつこ  
うに説明できなかつたのです。この件をめぐるのは、何年経っ  
てもその悲願をだれにも言えないままでした。何年も、です。  
それが何年かおわかりになりますか。たいへん長い年月です。  
今から五年ほど前に『意志』<sup>55</sup>という小説の翻訳を始めたときま

で、その悲願は果たされぬままだったのですが、まことに驚く  
べきことでありましょう。実は、その後も果たされてはいない  
のです。というのも、その悲願が別のかたちで叶えられたもの  
ですから。すなわち、『意志』を翻訳するためにしつかりした  
辞書が必要になったので、ビアンキがほしいという気持ちがあ  
たたび高まりました。私はポケットに八〇リラを入れ、一  
散にヴァイスという名の本屋に行きました。<sup>56</sup>ビアンキはあるか  
と尋ねると出してくれたのですが、私はそれを見るやいなや抱  
きしめてしまうのではないかとばかり思っていました。でも、  
違ったのです！ あれほど長い年月、恋焦がれていた書物を目  
にして私の興味が失せてしまったと言えば、怪しまれるでしょ  
うか。その理由はどうにも不可解なものです。私が心の底から  
愛してやまなかつたビアンキの本は、緑色の装丁を施されてい  
ました。その色が違っていたことが影響したとは、何ともおか  
しなことではありませんか。その上、本屋は「こんなものあり  
ます」と言つてハンジェリの辞書の冊子を私の目の前に置きま  
した。<sup>58</sup>比べてみると、それはビアンキのものよりもしつかりし  
ているようなので、ビアンキの本はどうでもよくなったので  
す。私はハンジェリの本を買いました。ご覧のとおり、人間の  
悲願とは何と変わり身の早いことでしょうか！

〔後編に続く〕

訳注

- (1) たとえば、翻訳作品には兄アリ・セダトや父ジェヴデト・パシヤ、その他の著作にも父アフメト・ミドハトの手が入っているのではないかと噂された。この点については、本訳稿の後編「四、若き妻」の章を参照のこと。
- (2) 一八九三年のシカゴ万博は、コロンブスによるアメリカ航海四〇〇周年を記念して開催された。会場内には「世界女性図書館」が設けられ、世界各地で活躍する女性たちの業績が紹介された。
- (3) ファトマ・アリエエがアフメト・ミドハトに宛てて自身の経歴を綴った書簡を引用する、ということ。
- (4) ルーメリ・ヒサルは、オスマン朝第七代君主メフメト二世(在位一四四四～四五、五一～八一年)がコンスタンティノール攻略の橋頭堡としてボスフォラス海峡の西岸(ヨーロッパ側)に築いた城砦のこと。イスタンブル旧市街のヴェズネジレルに本邸を構えていたジェヴデト・パシヤ一家は、夏になるとその城砦の近辺にある別邸に移り住んだ。
- (5) もともとイスラーム法官やマドラサ教師などをめざす教職(イルミイェ)の階梯を進んでいたジェヴデト・パシヤは、一八六六年に文官職(ミュルキイェ)に転じ、アレツポ州知事に任ぜられた。なお、オスマン帝国では一八六四年、ミドハト・パシヤが知事を務めるトゥナ州で新たな州制が導入され、以後、各地で順次施行された。
- (6) レシト・パシヤ・ムスタファ・レシト・パシヤ(Mustafa Resid Paşa, 一八〇〇～五八年)のこと。オスマン帝国の近代化改革「タンズイマート」の開始を告げる一八三九年のギュルハーネ勅令起草したことで知られるオスマン帝国の政治家。ミドハト・パシヤやジェヴデト・パシヤら次代を担う若手官僚の育成にも努めた。
- (7) コヒー沸し(Kahve cezvesi)：コヒー豆の粉末を煮出すために用いる柄付きの小鍋(ジェスヴェ)のこと。
- (8) スキーン氏：ジェイムズ・ヘンリ・スキーン (James Henry Skene, 一八一二～八六年)のこと。オスマン帝国に赴任し、クリミア戦争中からアレツポ総領事を務めた。William Forbes Skene, *Memorials of the Family of Skene of Skene*, Aberdeen, 1887, p. 141.
- (9) ボヤール(boyar)：ここでは東欧、とくにルーマニアにおける貴族層のこと。スキーンの妻は、ルーマニア王国の前身の一つモルドヴァ公国の要職の家系に連なっていた。Ibid.
- (10) アフメト・ヴェフィク・パシヤ(Ahmed Vefik Paşa, 一八二二～九一年)：オスマン帝国の政治家・学者。代議院(下院)の初代議長や大宰相を務める一方、モリエールの翻案や『オスマン語辞典』([Ahmed Vefik Paşa,] *Lehce-i 'Osmanî*, 2 vols, [İstanbul]: Tab'hane-i 'Amire, 1293 [1876/77]) の編纂も手が

けた。

- (11) ロフチャ・現ブルガリア領ロヴェチ。ジェヴデト・パシャの故郷でもあった。
- (12) 『ムズラクルの教理問答』 (*Mızraklı İlm-i Hal*) : 一六世紀末以降に記されたと考えられる作者未詳の教理問答集。一九世紀半ばから刊本として普及した。Anonym, *Mızraklı İlm-i Hal*, İstanbul: Matba'a-i Bâb-ı Hazret-i Ser'askerî, 1258 [1842/43]; cf. M. Seyfettin Özege, *Eski Harflerle Basılmış Türkçe Eserler Kataloğu*, 5 vols., İstanbul: Fatih Yayınevi Matbaası, 1971-1979 (vol. 3, p. 1140, here).
- (13) 『聖誕』 (*Mevlid-i Şerif*) : Süleyman Çelebi, *Mevlid-i Şerif*, İstanbul: Bezm-i Âlem Valide Sultan Mektebi Matba'ası, 1270 [1853/54]; cf. Özege, op. cit., vol. 3, pp. 1131-1132.
- (14) ナスフ体：アラビア文字の代表的な六書体の一つ。活字体としても用いられた。なお、アラビア文字は原則として子音しか表記せず、とくに初級の読み物については三つの母音符合をはじめとする数種の補助記号を付して発音のしかたを示すことがある。
- (15) イブン・ハージブ (*Ibn Hâib* 一一七五～一二四九年) : カイロ生まれのアラビア語文法学者。スンナ派イスラームの四法学派の一つ、マリーク学派の法学者としても知られる。
- (16) ズイーバー (*Ziba*) は、アフメト・ミドハトと彼のいわゆる第二婦人メレキ (*Melik* 一八六八年生まれ) との娘。
- (17) 『バッタル・ガズイー』 (*Battal Gazî*) : ウマイヤ朝期に実在したイスラームの信仰戦士 (ガズイー) にまつわる英雄物語のこと。のちにアナトリアで『バッタル・ナーメ』 (*Battalname*) としてまとめられた。
- (18) 『血の呪』 (*Kan Kal'ası*) : イスラームの預言者ムハンマドの従弟にして女婿であったアリー (六六一年没) の勇戦を描いた物語のこと。
- (19) 『アスイス・エフエンデイの空想物語』 (*Muhayyela't-ı 'Aziz Efendi*) : クレタ島出身の文人アズイズ・エフエンデイ (一七九八年没) が著した三つの「空想」 (*hayâl*) からなる物語 (G'ozu) 。'Alif 'Aziz Efendi, *Muhayyela't-ı 'Aziz Efendi*, İstanbul: Matba'a-i 'Âmirî, 1268 [1851/52]; cf. Özege, op. cit., vol. 3, p. 1199.
- (20) 『千夜物語』 (*Ef' Leyle*) : 『千夜一夜物語』 (いわゆるアラビアン・ナイト) のこと。オスマン帝国では、第三二代君主アブデュルメジト (カリフとしてはアブデュルメジト一世、在位一八三九～六一年) の時代にアフメト・ナズイフによるトルコ語訳 (Ahmed Nazif, tr., *Terceme-i Ef' Leyle ve Leyle*, 6 vols., İstanbul: Matba'a-i 'Âmirî, n. d.; cf. Özege, op. cit., vol. 4, p. 1814) が刊行された。Veli Ulutürk, "Binbir Gece," *TDVİA*, vol. 6 (1992), pp. 180-181.

- (21) タアリーク体…アラビア文字の書体の一つ。イラン発祥の古風な書体。
- (22) ルクア体…アラビア文字の書体の一つ。オスマン帝国期に筆記体として常用された。
- (23) カシーダ…アラビア文字の特定の部位をわざと横長に伸ばして書く装飾法。
- (24) たとえば、ファトマ・アリエの幼少期にあたる一八六〇年代末から七〇年代初頭に帝都イスタンブルで発行された日刊紙の値段は、一部あたり一クルシユ前後であった。
- (25) アフメト・シドハトからファトマ・アリエに宛てた書簡(一八九四年二月二六日)には、<sup>1)</sup>のぎのようにある。「貴女の先生だったムスタファ・エフェンディを存じています。今は亡きエトヘム・パシヤ(オスマン帝国の大宰相を務めたイブラヒム・エトヘム・パシヤ(一八一八〜九三年)のこと)のお屋敷で懇談したものでした。まことに徳高き御方でした」。
- Ahmed Midhat Efendi, *Fazıl ve Feylesof Kızım: Fatma Ahye'ye Mektuplar*, Fatma Samime Inceoğlu and Zeynep Süslü Bektaş, eds., Istanbul: Klasik, 2011, p. 190.
- (26) 『トルコ語文法読本』(Ahmed Cevdet, *Kavâ'id-i Türkîyye*, [Istanbul]: Matba'at-ı 'Âmiriye, 1292) はジェヴデト・パシヤが初等学校の生徒向けに作成した文法書であるが、これが刊行されたのは一八七五年のことである。このことをファトマ・アリエは二三歳であり、当時「七歳であった」とする本文の記述と一致しない。そこで、<sup>2)</sup>に見える『トルコ語文法読本』とは、やはりジェヴデト・パシヤが同僚の政治家ファト・パシヤ (Keçecizâde Mehmed Fuad Paşa<sup>1)</sup> 一八一五〜六九年) とともに作成し、一八六四年に刊行した『オスマン語文法読本』(Mehmed Fu'âd and Ahmed Cevdet, *Kavâ'id-i 'Osmaniyye*, [Istanbul]: Matba'at-ı 'Âmiriye, 1281) の一部<sup>2)</sup> あるはその入門編として作成された『文法読本入門』(Ahmed Cevdet Paşa, *Mechal-i Kavâ'id*, Istanbul: Dâru'l-İthâ'atü'l-'Âmiriye Litografya Desgâhı, 1268) のことを指していると考えられる。Cf. Özege, op. cit., vol. 2, p. 845; *ibid.*, vol. 3, pp. 1063-1064.
- (27) ボアズイチ (Bogazici) とは、黒海とマルマラ海を結び、イスタンブルの街をアジア側とヨーロッパ側に隔てるボスフォラス海峡のこと。ここでは同海峡の西岸(ヨーロッパ側)にあるルーメリ・ヒサールの別邸のことを指している。訳注(4)も参照のこと。
- (28) 官員養成校 (Mahrec-i Aklâm) : 官員養成を目的として一八六二年に開設された一年制の「官員学校」(Mekteb-i Aklâm) は、六三年に三年制に拡充され、「官員養成校」と改称された。Selçuk Aksın Somel, *The Modernization of Public Education in the Ottoman Empire 1839-1908: Islamization, Autocracy and Discipline*, Leiden: Brill, 2001, p. 50.

(29) 『無二の真珠』 (*Dirri-i Yekâ*) : スンナ派イスラームの四法学派の二つ、ハナフィー学派の教理問答要説。Imâmzâde Mehmed Es'ad, *Dirri-i Yekâ*, Istanbul: Matba'a-i Âmiriye, 1243 [1827/28]; cf. Özege, op. cit., vol. 1, pp. 311-312.

(30) たとえば、クルアーン第二章第三〇節には、つぎのようなくだりがある。「さて汝の主が、「わしは地上に代理者を置こうと思う」と天使たちに言いたもうたとき、「私たちがあなたの栄光をほめ讃え、あなたを崇めておりますのに、どうして害をなし血を流す者を地上にお置きになるのですか」とみなが言った。神は答えて言いたもうた、「わしはおまえたちの知らないことを知っている」。藤本勝次・伴康哉・池田修訳『コーラン』(中公クラシックス) 中央公論新社、二〇〇二年、八ページ。

(31) このくだりは、ファトマ・アリエエが一八九一年に『真実の解説者』で連載し、翌九二年に書籍化された対話形式の評論『イスラームの女性』(*Nisvân-i İslâm*) のことを念頭に置いてつくると考えられる。Fatma 'Aliyye, "Nisvân-i İslâm," *Tercümân-ı Hakikat*, nos. 3968-4004 (6 Teşrin-i Evvel [October] 1891-17 Teşrin-i Sani [November] 1891); Fatma 'Aliyye, *Nisvân-i İslâm*, Istanbul: [Tercümân-ı Hakikat Matba'ası], 1309.

(32) 本書のオスマン語テキストにおいて、この部分には実際にラテン・アルファベットの「a」の活字が用いられている。

(33) 女子師範学校 (*Dârü'l-ınu 'alimât*) : 一八六九年に制定された「公教育法」(*Ma'ârif-i Umûmiyye Nizâmnamesi*) の規定を受けて、翌七〇年に開設された女性教員養成のための学校。Cemil Öztürk, "Dârülmualimât," *TDYTA*, vol. 8 (1993), pp. 549-550.

(34) イルヤス・マタル・エフエンテイ (*İlyâs Matar Efendi* 一八五六―一九一〇年) : ベイルート近郊の一村にギリシア正教徒の子として生まれる。医学と法学を修め、各種の官立学校の教師や裁判官を務めた。シリアの歴史や公衆衛生に関するアラビア語やトルコ語の著作がある。Mehmed Zeki Pakalın, *Sicill-i Osmani Zeyli: Son Devir Osmanlı Meşhurları Ansiklopedisi*, vol. 10, Ankara: Türk Tarih Kurumu, 2008, pp. 7-8. 没年に  $\text{١٣٠٦}$  Ahmet Mithat Efendi, *Fatma Aliye Hanım yehuti Bir Muharrire-i Osmaniyenin Neşesi*, Ayşe Asır, ed., Istanbul: Dergâh Yayınları, 2016, p. 46, note.

(35) シャルル・ピエール・シャプサル (Charles-Pierre Chapsal 一七八七―一八五八年) が作成した「新フランス語文法」(*Charles-Pierre Chapsal and François Noël, Nouvelle grammaire française*, Paris, 1823)  $\text{١٣٠٣}$  Senem Timuroğlu, *Kanallanmış Kadınlar: Osmanlı ve Avrupalı Kadın Yazarların Dostluğu*, Istanbul: İletişim Yayınları, 2020, p. 51, n. 31.

(36) アンブロワーズ・カルファ (*Ambroise V. Calfa* 一八二六―一九〇六年) の『ポケット版フランス語・トルコ語辞典』(*A.*

- V. Calfa, *Dictionnaire de poche français-turc*, Paris, 1865) または『フランス語・トルコ語会話の手引』(Ambroise V. Calfa, *Guide de la conversation français-turc*, Paris, 1859) のコマを指して「さきえらるゝ。Timuroğlu, op. cit., p. 51, n. 32; cf. Abdullah Uçman, “Kalfâ'nın Lüğati Üzerine,” *Kitaplık*, no. 208, 2020, pp. 126-131.
- (37) ジェヴェト・パシヤは、一八六三年にボスニア巡察をおこなった。この言及されている二人は、そのときに当地から連れてこられたものと思われる。
- (38) 『ヴェンブー辞典』(*Tuhfe-i Vehbi*): 古典詩人として知られるスンビュルザーデ・ヴェフビー(一八〇九年没)が一八世紀末に作成したペルシア語・トルコ語辞書の注。Sünbülzâde Vehbî, *Tuhfe-i Vehbî*, Istanbul: Darü'l-İhbâ'atü'l-ma'mûre, 1213 [1798/99]; cf. Özege, op. cit., vol. 4, pp. 1877-1878.
- (39) フランスの宗教学家にして作家フェヌロン(一六五二〜一七二五年)が著した『テレマックの冒険』は、オスマン帝国の政治家ユスフ・キヤミル・パシヤ(一八〇八〜七六年)によってトルコ語に翻訳され、一八六二〜六三年に刊行された(Yusuf Kâmil Paşa, tr., *Tercüme-i Telemak*, Istanbul, 1279)。
- (40) 『娯楽物語集』(Leîfî-i Rivâyât): アフメト・ミドハトが一八七〇〜九五年に刊行した二五分冊の物語シリーズのこと。平易な語り口で読者を獲得し、オスマン近代における読書習慣の普及に寄与した。“Leîfî-i Rivâyât,” *Türk Dili ve Edebiyat Ansiklopedisi*, vol. 6, Istanbul: Dergâh Yayınları, 1986, p. 83.
- (41) 『千日物語』(*Efîrî'l-nehar*): フランスの東洋学者トランソフ・ペティエ・ユ・ラ・クロワ(一六五二〜一七二三年)が著した『十一日物語』(Français Pêtis de la Croix, *Les mille et un jours*, 5 vols, Paris, 1710-1712)の翻訳。Ahmed Râsîd, tr., *Efîrî'l-nehar ve'l-nehar*, vol. 1, Istanbul: Mekteb-i Fünûn-i Harbiyye-i Şâhâne Matba'ası 1284 [1867/68]; *ibid.*, vol. 2, Mekteb-i Harbiyye-i Cenâb-i Mulûkâne Matba'ası, 1287 [1870/71]; cf. Özege, op. cit., vol. 1, p. 334.
- (42) 『七人像』(*Haft Paykar*): ニザーミー・キャンジヤヴィー(Nizâmî Ganjavî, 一四一〜一四九九年?)のペルシア語長編叙事詩「五部作」(ハムゼ)のうち最高傑作とされる。邦訳として、ニザーミー『七王妃物語』(黒柳恒男訳)平凡社、一九七一年。
- (43) 『最初の教師』(*Hâce-i Eved*): アフメト・ミドハトがイスタンブルの孤児授産施設「技能学校」(Mekteb-i Sanâyi')の授業用に作成した教科書。Ahmed Midhat, *Hâce-i Eved*, [Bagdad]: Bağdad Vilâyet Matba'ası, 1286 [1869/70]; cf. Özege, op. cit., vol. 2, p. 478.
- (44) 『船乗りハサン』(*Hasan Mellân*): 『船乗りハサン』あるいは『秘密のなかの秘密』のこと。フランスの作家アレクサンドル・

デュマール＝ペール（一八〇二～七〇年）の長編小説『モンテ・クリスト伯』（一八四四～四五年）を翻案した冒険物語。Ahmed Midhat, *Hasan Melah yahud Sırr-ı İnde Esrâr*, İstanbul: Sark Matba'ası, 1291 [1874/75]; cf. Özgeç, op. cit., vol. 2, p. 513.

- (45) 『この世に二度生まれよ』（*Dünyâya İkinci Gelış*）：『この世に二度生まれよ』の世に二度生まれよ、あるいはイスタンブルで何が起こったか』の序文。Ahmed Midhat, *Dünyâya İkinci Gelış yahud İstanbul'da Neler Olmuş*, İstanbul: Sark Matba'ası, 1291 [1874/75]; cf. Özgeç, op. cit., vol. 1, p. 310.

- (46) 『ラクム・エフエンディ』（*Râkım Efendi*）：『フェラートゥン・ベイとラクム・エフエンディ』の序文。Ahmed Midhat, *Felâtin Beyle Râkım Efendi*, İstanbul: Kurk Anbâr Matba'ası, 1292 [1875/76]; cf. Özgeç, op. cit., vol. 1, p. 387. 邦語による紹介として、歴史学研究会編『世界史史料』8『岩波書店』二〇〇九年、一三五～一三七頁。

- (47) 『万国史』（*Kâ'inat*）：一八七二～八一年にアフメト・ミドハトが刊行したヨーロッパ各国史シリーズのこと。イギリス、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、ロシア、ベルギー、オランダ、ドイツ、オーストリア、スイス、ポルトガル、スペイン、イタリア、ギリシアが取り上げられ、一八七五年刊行の補遺（Ahmed Midhat, *Zeyl-i Kâ'inat*, İstanbul: Kurk Anbâr Matba'ası, 1292; cf. Özgeç, op. cit., vol. 2, pp. 799-800）でフランス

ンスも加えられた。

- (48) 『クルク・アンバル』（*Kurk Anbar*）：アフメト・ミドハトが創刊した大衆向けの文化雑誌。一八七三年から七六年まで発行された。誌名は「万学の宝庫」ほどの意。実際、同誌では古今東西の学問技芸、人物、出来事などが百科全書的に紹介されている。本訳稿の後編「三、青年期」の章も参照のこと。

- (49) ヤンヤ・ギリシア語名イオアニナ。ギリシア北西部の都市。

- (50) コルフ島：ギリシア語名ケルキラ島。ギリシア西部のイオニア諸島の西北端に位置する島。一八一五年にイギリスの保護領とされ、六四年にギリシア領となった。

- (51) 一七九九年、オスマン帝国の総督ジェツザール・アフメト・パシャ（Cezâr Ahmed Paşa, 一八〇四年没）が、シリア・パレスチナ方面に侵攻してきたナポレオン・ボナパルトの遠征軍をアッカーで撃退した出来事を指している。

- (52) 『ジル・ブラース物語』：フランスの作家アラン＝ル・サージュ（一六六八～一七四七年）が著した四巻本の長編小説。一七一五～三五五年刊。邦訳として、ル・サージュ『ジル・ブラース物語』（杉捷夫訳、全四巻、岩波文庫）岩波書店、一九五三～五四四年。

- (53) フランスの東洋学者ビアンキ（一七八三～一八六四年）らで作成した『トルコ語・フランス語辞典』（J. D. Kieffer and T. X. Bianchi, *Dictionnaire turc-français*, 2 vols., Paris, 1835-

- 1837) と『フランス語・トルコ語辞典』(J. D. Kieffer and T. X. Bianchi, *Dictionnaire français-turc*, 2 vols., Paris, 1843-1846) の「アラ」Ömer Faruk Aktın, “Bianchi, Thomas-Xavier,” *TDVİA*, vol. 6 (1992), pp. 117-120.
- (54) リラは二〇〇クルシユに相当する。訳注(24)も参照のこと。  
『意志』: フランスの作家ジョルジユ・オーネ(一八四八〜一九一八年)の小説(*Georges Ohnet, Volonté*, Paris, 1888)。  
ファトマ・アリエは一九〇〇年に「一人」(*Bir Kadın*)の筆名で、そのトルコ語訳(*Bir Kadın*, tr. *Mervan Der-sa'adet [İstanbul]: Kasbâr Marba'ası*, 1307)を発表し、文壇にデビューした。本訳稿の後編「四、若き妻」の章も参照のこと。
- (56) イスタンブル新市街の「大通り」(*Câdde-i Kebir*、現在のイステイクラル通り)にあったヴァイス (*Weiss*) 書店のことである。Johann Strauss, “Les livres et l'imprimerie à Istanbul (1800-1908),” *Paul Dumont, ed., Turquie: Livres d'hier, livres d'aujourd'hui*, Istanbul: Isis, 1992, p. 16.
- (57) ファトマ・アリエが友人の別荘で目にしたというビアンキの辞書は、緑色の装丁を施された初版本であった。これに対して書肆で目にしたというビアンキの辞書は、おそらく装丁の異なる別の版であったと考えられる。思い入れのある色合いと違ったことで、それまでの情熱が一挙に冷めてしまったとこういってあろう。
- (58) イスタンブルでギリシア正教徒の家庭に生まれ、一八二一年のギリシア独立戦争勃発後にロシアに亡命したハンジェリ(一七六〇〜一八五四年)が作成した『フランス語・アラビア語・ベルシア語・トルコ語辞典』(*Alexandre Handjéri, Dictionnaire français-arabe-persan et turc*, 3 vols., Moscow, 1840-1841)の「アラ」Hasan Eren, “Handjéri, Alexandre,” *TDVİA*, vol. 15 (1997), p. 550.